岩波文庫

889—890

白秋詩抄

北原白秋著

白秋詩抄 ★★

明治，大正，昭和の三代を通じて最も豊饒なる詩人は白秋である．“邪宗門”以下“水墨集”“海豹と雲”等より代表作を抄出した．

緑 16

岩 波 文 庫

889—890

白 秋 詩 抄

北 原 白 秋 著

岩 波 書 店

小序

この詩抄は、もとより選集であつて、わたくしの詩業の片鱗である。片鱗ではあるが、主として自身の詩の本格とするものの一部一部でないことはない。わたくしの詩風も幾變轉したが、この詩抄は、多少ともその時代の季節と心音とを傳へてくれるであらう。嚴しく鏡に映して描きとつた自畫像といふのでもないが、無くてはならぬ光や影は收めてある。ただ今日の眼で氣易く親しくこれに臨んだ。削除した部分にも何か棄て難い好みは動いたが、一つの枝を立體として浮かす爲には、その空間表象は念はねばならなかつた。重複を忌み、同型の枝葉はその多くを伐り去つた。しかも密かに愧づる故は、我が詩業を通貫する一つの脊梁が、わづかにこれだけの高さのものかといふことである。

抄した詩は「邪宗門」「雪と花火」「白金ノ獨樂」「水墨集」「海豹と雲」の五つの詩集に求めた。かの抒情小曲集「思ひ出」(明治四十四年)は次の抒情詩抄の爲に遺し、童謠民謠の類もすべてこの詩抄には與らない。

なほ、大體のことは詩友吉田一穂君に委(まか)した。かうした小册子の編纂や、詩の布置(ふち)、紙面の整齊といふことも、わたくしたちにはかなりの詩魂を要する。快(こころよ)く感じていただけば忝(かたじけな)く思ふ。

昭和八年四月

北原白秋

白秋詩抄目次

「邪宗門」抄

海豹と雲

昭和四年八月初版・アルス刊

水上

水上は思ふべきかな。
苔清水湧きしたたり、
日の光透きしたたり、
橿、馬醉木、枝さし蔽ひ、
鏡葉の湯津眞椿の眞洞なす
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。
山の氣の神處の澄み、
岩が根の言問ひ止み、
かいかがむ荒素膚の

荒魂(あらみたま)の神霊(かみむす)び、神つどへる
水上(みなかみ)は思ふべきかな。

水上(みなかみ)は思ふべきかな。
雲、狭霧(さぎり)、立ちはばかり、
丹(に)の雉子(きぎし)立ちはばかり、
白き猪(ゐ)の横伏(よこふ)し喘(あへ)ぎ、
毛の荒物(あらもの)のことごとに道塞(ふた)ぎ寝(ぬ)る
水上(みなかみ)は思ふべきかな。

水上(みなかみ)は思ふべきかな。
清清(さわさわ)に湧きしたたり、
いやさやに透きしたたり、
神ながら神寂(さ)び古(ふ)る
うづの、をを、うづの幣帛(みてぐら)の緒(を)の鎮(しづ)もる

水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。
青水沫とよみたぎち、
うろくづの堰かれたぎち、
たまきはる命の渦の
渦巻の湯津石村をとどろき搖る
水上は思ふべきかな。

獨神

天地の初發の時、
かぎりなく虛しき時、
獨神、成り坐しにけり。

萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。　こをろ。

國稚く、　浮脂なす、
海月なす漂へる時、
獨神、　ひと柱のみ。
　萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。　こをろ。

萬象無し、　光すら、
影すらも、　賴む影、
獨神、　ただ幽かにて。
　萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。　こをろ。

窮みなし、常久に、
窮みなし、文もなし、
獨神、御身隠します。
　萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。こをろ。

晝もなし、夜もなし、
寒しとも、暑しとも、まだ、
獨神、ただ徹ります。
　萌え騰る葦牙の
鮮緑の神よ。こをろ。

言問

岩が根に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
苔水のしみいづる
かそけさ、このしたたり。

草に木に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
おのづから染みいづる
わびしさ、このあかるさ。

小さき日に言問はむ、

いにしへもかかりしやと。
　かがやきの空わたる
　わりなさ、このはるけさ。

神神に言問（こととと）はむ、
いにしへもかかりしやと。
　はればれとひびき合ふ
　松かぜ、このさわさわ。

狽

荒魂（あらみたま）
まどろまず。
大き月

滿ちて、照りぬ。

何を澄む
夜の蒼ぞ。
とりよろふ
山の眞洞。

草も木も
押し靡け、
疾く、野分
吹きすさむを。

安からず、
また寢ねず、
千速振る

神ことごと。

たづたづし、
隈ふかし、
山河の
瀬に鳴りつつ。

直向ふ
月にのみ、
耳は裂け、
地に喚べば。

雪かとも
身は白し、
大口の

真神(まがみ)、狼。

螢　に

晝は沸き、
蒼蠅(さばへ)なすもの、
夜は夜とて
光る神々。
　　（ほうたるよ）

言問(ことと)ひぬ、
遠つ神代(かみよ)は
青水沫(あをみなわ)、
石根(いはね)、木の立。

（ほうたるよ）

神なりき、
かがやきの祕所、
稚きは
驚きぬ、皆。
（ほうたるよ）

精靈、
我や何とも、
誰か、わかむ、
善きと、惡しきと。
（ほうたるよ）

夜は蒼し、

災は滿つ。
ただ光る
美しき神。
（ほうたるよ）

とらふなし、
この夢、現、
なにを、さは
拂はむぞ、また。
（ほうたるよ）

ああ、保て、
雨を山査子、
にほひのみ
溜めよ、この闇。

（ほうたるよ）

早春

香取神宮

槇のこずゑに、青鷺の
群れて巣をもつ幽けさよ。
空のはるかを、日の暈の
凝りかけつつ行き消えぬ。

水禽

さながらや、一片の
蓮華、浮舟。

息づかし、黄の嘴
尾に反りて、白き水禽。

楚々として、うしろ向く
細首の、その長さ。

眼の聰さ、惱ましさ。
七八月。

後ざまの水搔や、
やや亂れて。

江の撓り、とどまらず、
また淀めば。

鵬たさよ、はてなさよ、
ああ、水禽（みづとり）。

紫よ、
雲は午（ひる）。

くわうくわうと聲を放（はな）て、
月に向つて。

奉悼曲

冷えとほる白き鳥
翼（は）うち翔（と）ばず。

凍みこほる白き華、
今朝、現なし。

十善のみくらゐに
君はおはすを。

またいつかみそなはす、
冬の日の白き花鳥圖。

白鷺

白鷺は、その一羽、
睡蓮の花を食み、

水を食み、
かうかうとありくなり。

白鷺は貴くて、
身のほそり煙るなり、
冠毛の拂子曳く白、
へうとして、空にあるなり。

白鷺はまじろがず、
日をあさり、おのれ啼くなり、
幽かなり、脚のひとつに
蓮の實を超えて立つなり。

白牡丹

白牡丹、大き籠に滿ち、
照り層む内紫、
豐かなり、芬華の奥、
とどろきぬ、閑けき春に。

蝶は超ゆ、この現より、
うつら舞ふ髭長の影。
晝闌けぬ。花びらの外、
歎かじな、雲の驕謐を。

白牡丹、宇宙なり。

また、薫す、専なる白。
この坐、ふたつなし、ただ。
位のみ。ああ、にほひのみ。

和み

にぎみたま
そは童。
香に和む
影の、野茨や。
日の文よ、
そよかぜよ、ただ。

なづさはず、
行きも過(す)がはず。

かげろふよ、
さざなみよ、ただ。

水の紋(もん)、
幼(をさ)な息づき。

にほふのみ、
ゆらぐのみ、ただ。

無爲(むゐ)よ、ああ、
白き水鳥。

遊ぶのみ、
潜くのみ、ただ。

鴛鴦

冬の日の鴛鴦の
つぎほなさ、
ひとみの黒さ。
根白葦、蓮の根の
氷にも
寄り添ふ身の。

老いてなほ、うつくしき
飾り羽や、
たのめなき陽や。

さむざむし池の面や、
行けば行き、
とめぐればただめぐりて。

すべはなし、朱のうすき
水かきや、
ちらら見せて。

つれづれと、頰に並ぶ
番ひ鳥、
薄日、鴛鴦。

老鷄

さわさわと起つ風の
音響けば、
鷄は羽ばたきぬ、はたはた、ああはたはた、
白檮の、葉廣檮の
かがやく陽を目ざして。

鷄冠や、猛猛し
眼の稜稜、
尾羽、翼、はららぎぬ、はたはた、ああ、はたはた、
岩根の、白羽蟻の
吹雪と舞ふ柱を。

力よ、荒魂(あらみたま)
飛び搏(はた)くと、
勢(きほ)ひ蹴(け)るひと空や、はたはた、ああ、はたはた、
光の、陽(ひ)のしじまの
耿(かう)たる幅(はば)亂すと。

凄(すさ)まじ、身は重(おも)し、
青(さを)の夏(なつ)を、
朱(しゆ)の古りし鷄よ、はたはた、ああ、はたはた、
すべなし、飛び羽うつと
いくばくも飛ばず落ちぬ。

汐首岬

たうたうと波騒ぐ汐首岬、
鮮やけし、雜草の青、さみどり、
　ああ、げに、いにしへのアイヌ・モシリ、
　言問へよ、今にして邊の岬岬。

味鳧の浮きなづむ海越え來て、
噴き騰る縱雲の秀をあふげば、
　夏よ、げに、聲はあり、カムイ・ユカラ、
　その聲は、風と滿ち、照り響けり。

朗らかや、すがし葉の大廣葉の

蕗(ふき)の葉の下(した)つ人、コロポックル、
　呼べよ、げに、神はあり、オイナ・カムイ、
　さながらに立つ影の素(す)の裸男(はだかを)。

ここ過ぎて、神ながら身は新らし、
ここ過ぎて、我が息吹(いぶき)蘇(よみがへ)らむ。
　人よ、げに、ひたごころ直(す)ぐなる神、
　白雲の噴(ふ)き騰(あが)る國思へや。

たうたうと波騒(さや)ぐ汐首岬、
鮮やけし、雑草(あらぐさ)の青(さを)、さみどり。
　ああ、げに、いにしへのアイヌ・モシリ、
　言問へよ、今にして邊(へ)の岬岬(さきざき)。

註　アイヌ・モシリ　　蝦夷島（アイヌ語）

カムイ・ユカラ　神謡
オイナ・カムイ　古傳神

○曇り日のオホーツク海

光なし、燻し空には
日の在處、ただ明るのみ。

かがやかず、秀に明るのみ、
オホーツクの黒きさざなみ。

影は無し、通風筒の
帆の綱が邊に搖るるのみ。

眺めやり、うち見やるのみ、
海豹(あざらし)のうかぶ潮漚(しほなわ)。

寒しとし、暑しとし、ただ、
霧と風、過(す)がひ舞ふのみ。

われは誰(た)ぞ、あるかなきのみ、
酔はむとも、醒(さ)めむとも、まだ。

燻(いぶ)し空、かがやかぬ波、
見はるかす圓(まろ)き涯(はて)のみ。

○樺太の山中にて

尾白鷲眼を放つ梢には
横雲の縹雲ほのあかりぬ。

ああ、蒼し、黒椴のさるをがせ、
いつの日か花咲かむ、香も幽かや。

校倉よ、露西亜びとの住み棄てし小舎、
驛遞のフラフにも朱は褪せたり。

霧は飛ぶ、霧は飛ぶ、山高きに
夏もなほ氣流のみ冷えまさるを。

雲の上に棲む魚よ、みづうみの鱒、
縹緲とふりあふぐ人いくつぞ。

凜として將た思ふ、カムイ・エカシ、
旅行けば我すらや神に入るなり。

註　カムイ・エカシ　神々の祖先（アイヌ語）

冬眠

ねむれよ、やすらかに、
冬のあひだ、
まどろめよ、和魂の

香(か)にとろみて。

ねむれよ、おだやかに、
蛇(くちなは)よ、かはづ、
まどろめよ、おのが肉(しし)
食(は)み足(た)らひて。

ねむれよ、このもしく、
夢も欲(ほ)らず、
まどろめよ、土(つち)の室(むろ)
塗(ぬ)りとざして。

ねむれよ、息(いき)の緒(を)の
あるかなしに、
まどろめよ、ゆるぎなく

酔ひほうけて。

ねむれよ、やはらかに、
口ももとめず、
まどろめよ、こごり凍(し)む
地をいとひて。

ねむれよ、神ごころ、
冬のあひだ、
まどろめよ、ほろと、ただ、
ああ、とろみて。

○雑木

雑木こそうれしけれ、
そのもみぢも。
こもごもに、日のひかり
さしかひつつ。

雑木こそうれしけれ、
そのにほひも。
ほのぼのと、靄と雨
なづさひつつ。

雑木こそうれしけれ、
そのこずゑも。
さむざむと、雀など
かい寄りつつ。

雑木(さふぎ)こそうれしけれ、
その楉枝(しもと)も。
ほきほきと、ゐろり火に
折りくべつつ。

月夜の谿

夜の月映(つくばえ)に流るるは
すずしき秋の縹雲(はなだぐも)。
(月こそ神よ、
まどかにて。)
ひまらや杉の葉は繊(ほそ)く、
ともすればそよぐそのこずゑ。

月こそ神よ、
　　まどかにて。)

現ならぬか、観るものの
青みやすらふ寂びと光澤。
　(月こそ神よ、
　　まどかにて。)

灯あしの芯の黄に燃えて
みながら濕める谿の戸や。
　(月こそ神よ、
　　まどかにて。)

童よねむれ、蟲の音の
降るがにすだくやはらぎを。

（月こそ神よ、
　まどかにて。）

湧き來る狹霧、むらさきの
地球はかをる、土の息。
（月こそ神よ、
　まどかにて。）

かの月映に流るるは
豐けき秋の縹雲。
（月こそ神よ、
　まどかにて。）

沼

いゆきもとほる腰の蓑、
霞はわびし、金の粉。

隠れて赤き月ゆゑに
光は立ちぬ、雲のうへ。

食めよ、白鷺沼のぬし、
かのさざなみの搖り波を。

すなどりびとはまづしくて、
むなしく水になげかひぬ。

影

月のひかりはそよかぜの
風並遠く樂しみぬ。

月のひかりはさざなみに
さらに滿しぬ、金の鎚。

放て、心を、へうべうと、
空と水とのなまめきに。

はかなかれども雲に鳥
誰そや遙けく影を追ふ。

泉石

萌黄の月の眉引に
鶴は啼くなり、土のうへ。

水に揺れあふ風のかげ、
花はこもらふひつじぐさ。

にほひをさなき泉石の
色のあひさにまじらへば、

蒼き夜ごろは貴くて、
ほのかなるものみな愛し。

野菜

月にかがやくひと束(たば)は
紫うすき根の蓮(はちす)。

群(む)れよ、白鷺、この空の
霜の夜あけの濃(こ)き青を。

なにか貧しき、いよいよに
心ととのふ世の母よ。

白き野菜も籠ながら
燃えて豊(ゆた)かに息づきぬ。

童女

匂ひだちつつ、うつつには
揺れしづまらぬ靄のいろ。

月のありかは見えながら
おぼめきまろし、水のうへ。

童女よ、坐れ、むらさきの
まつげにやどる露ならば。

はかなけれども、ほのぼのと
地球も燃えて行きめぐる。

架橋風景

鐵工は鐵をうつ。
かんかんとうつ。

光なり。白南風(しらはえ)の
樹木なり。

朱(しゆ)なり、明るき
橋材なり。

斜面なり。いきれたつ
雜草なり。

蛙なり、
盆地に燥つ。

童なり、
童と憎む。

聴けよ、この
満ち満つ熱を。

聴けよ、ただ
こらゆる息を。

一つなり、
憤るもの。

鐵工は强くうつ。
かんかんとうつ。

鋼鐵風景

神は在る、鐵塔の碍子に在る。
神は在る、起重機の斜線に在る。

神は在る、鐵柱の頂點に在る。
神は在る、鐵橋の弧線に在る。

神は在る、晴天と共に在る。
神は在る、鋼鐵の光に在る。

神は在る、近代の風景と在る。
神は在る、鐵板の響と在る。
神は在る、怪奇な機關に在る。
神は在る、モオタアと廻轉する。

神は在る、裝甲車と駛る。
神は在る、砲彈と炸裂する。

神は在る、圓形の利刃に在る。
截音は空をも削る。

神は在る、ダイナモの靈音に在る。
神は在る、一瞬に電光を放つ。

神は在る、鐵筋の劇場に在る。
神は在る、鐵工のメーデーに在る。
神は在る、車輪のわだちに在る。
轢音は野菜を喰ふ。

神は在る、はてしなき軌道に在る。
神は在る、雷雲に反響する。

神は在る、立體のキュビズムに在る。
表現派は都市を彎曲する。

神は在る、颯爽と牽引する。
神は在る、鮮麗に磁氣を生む。

神は在る、天體は鐵鑛である。
神は在る、炎炎と熾つてゐる。

天王寺の朝涼

朴の木に白き花群れ、
塔はあり、ひむがしの方。

月落ちて、吹きはらふもの、
まさしくも風は夏なり。

波だつや、空の朝涼、
拋物線、小鳥飛ぶ、飛ぶ。

紅(べに)くすむ扇骨木(かなめ)いけがき、
刈りそめてなんぞすがしき。

露はあり、石に音して、
しかもこは幽世(かくりよ)ならず。

愚(おろ)かなり、死にし、幽(かそ)けき。
げに、現(うつつ)、生くるに如(し)かず。

朴の木に白き花群れ、
鐘が鳴る。鐘が鳴るなり。

墓地

墓地は嗟嘆（なげき）の、愛の園、
また、思ひ出の樫（かし）の森。

墓地は現（うつつ）の露の原、
また、幽世（かくりよ）の苔（こけ）の土。

墓地は童（わらべ）の草の庭、
また、あひびきの青葉垣（あをばがき）。

墓地はそよ風しめじめと、
また透（す）き明（あか）る日のこぼれ。

墓地は幽けき花だまり、
また、むら鳥の木のたむろ。
墓地は薄黄の石だたみ、
また、奥ふかき朴の門。
墓地は銀杏の片かげり、
また、白毫の濡れ佛。
墓地は香華の色の海、
また象なき聲の網。
墓地は無緣の草いきれ、
また、ねむごろの水かげろふ。

墓地に光るは蟲のはね、
また、手相見の天眼鏡。

墓地の迷ひ路、間の辻、
また、横の柵、裏の道。

墓地の遊歩は爽やかに、
また、行きつまる石の寂。

墓地にも目だつ世の流行、
また、消えのこる江戸のふり。

墓地を通ふは女靴、
また、ゆきずりの製圖工。

墓地の圓屋根(まろやね)、納骨堂(なふこつだう)、
また、反(そり)青き塔のつま。

墓地は息づく靄(もや)の胎(たい)、
また、たましひの巣のしじま。

墓地は缺けゆく月の道、
また、太陽の眼のやどり。

墓地は乳屋の朝の時、
また、ちやるめらの暮の時。

墓地はよき森、よき廊下、
また、なぐさめの、笻(つゑ)の道。

墓地はよき庭、わが門べ、
わが賓客のよき小徑。

月と美童

月映の、露の野道の
ほんの濃い、向うの靄で。
　ぼうわう、ぼうわう、
あゝなにかしろく映えてる。
水芋のてらてらの葉の
その前を、音はしてたが、
　ぼうわう、ぼうわう、

おゝ誰か、ひきかへしてゐる。

美しい童(わらべ)よ、角髪(みづら)の子よ、
怖(こは)がるでない、怖がるでない。
　ぼうわう、ぼうわう、
あれはただ吠えるだけだよ。

月がまた雲を呼ぶのだ、
ぼうとした紫なのだ。
　ぼうわう、ぼうわう、
小さい蛾(が)までが輝くのだ。

な、みんなが思ひ出すのだ、かうした晩は、
美しい童(わらべ)よ、童(わらべ)のむかしを、
　ぼうわう、ぼうわう、

前の世の母上の、圓かな肩を。
匂やかであつた、世界は、ふじぎぬのやうな
光と空氣とに織られてゐた。
　ぼうわう、ぼうわう、
あした夜靄にも吠えてゐた何かだつたよ。

鵲

われは筑後の國に生れぬ

ふるさとの合歡の木かげを
ながれゆく水の音なり。
鵲のしろき下羽根、
月の夜と移る空なり。

おぎろなし、おもほへば、そは
眉に立つかげろふのごと。

童(わらべ)みな鵲を追ひ、
鵲と影をうしなふ。

朝

トラピスト修道院

搖(ゆ)りいづる鐸(すず)のかずの
六つあまり、七(なな)つか、八(や)つ。

夜はあけぬ、麵麭(パン)種(だね)の
粉(こな)かとも花は咲きて。

露ながら、人はあり、
いのりつつ、野に刈りつつ。

しづけさや、よき寺や、
カトリコの朝彌撒(あさみさ)や。

鷹(たか)のごと光るもの
山の氣に吹きながれて、

美しき八月や、
翼(つばさ)ただ海を指(さ)しぬ。

白藤

藤のはな軒ににほへり、
日の暮れて白き藤なみ。

松田にもほど近からし、
田舎馬車角吹きにけり。

まかで來し道了薩陀、
紫雲英田もうしろになりぬ。

草の香や、遊ぶ子どもや、
頭がち、跳ぬる足うら。

もの柔し、小糠たつ杵、
それすらや、さみし、このごろ。

うらがなし、田螺ころころ、
夜の昴宿しぶく泡だち。

いづれよし、餘光の微塵、
脚垂れて蜂もあがれり。

常無しや、爲すなしや、ああ、
春はゆく、かかはらず、また。

日の暮れて白き藤なみ、
酒匂川見えそめにけり。

白蛾

眉の毛深い白の蛾は、
能の翁を思はする。

淺夜の白い花生薑、
香には立つとも、白の蛾よ。

月に舞うては、飛ぶものの、
いつか萎ゆる翅の色澤。

とすれば明る脚ぼその、
朱の寂びがちの胸の粉。

なうなう、留まれ、白の蛾よ、
秋はほのかなものながら。

観る目はうつつ、飛ぶは夢、
月も闌くれば小さうなるはよ。

水墨集

雪に立つ竹

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らな幅のかげりがある。
幽かな綠とも、また紫ともつかぬ、
なんたるつめたい明りか。

竹はその雪の面に立ち、
ひとつひとつ立つ。
まつすぐなそれらの幹、
露はな間隔の透かし畫。

實にこまかな枯葉であるが、

それにも明日の芽立がある。
影する雲の藍ねずみにも
ああ、豆ほどの白金の太陽。

かうした午後にこそ閑けさはあれ、
光と影とのいい調和が、
濕つて、さうして安らかな慰めが、
おのづからな早春の息づかひが。

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らな幅のかげりがある。
雪に立つひとつひとつの竹、
それにも緑の反射がある。

雪煙

雪のけぶりは幽かながら、
つもればつもるほど立つ煙か、
ああ、あの孟宗の藪のしづけさ、
またしてもあなたこなたにしづるる、
そことなき月の光よ、雪煙よ。

雪後の聲

蜩が啼いてる、あ、月夜の
雪明りの中、

なんとしたことだ、あの
時ならぬ刻みは、聲音は。

あまりのこの閑けさ、
遠さ、幽けさ、
あ、また金の線が彈ける。

竹林の七賢

さても黄色い圓月である、
さても閑雅な竹林である。
七人の賢い人、風月の友、
この幽人たちの面持、姿、
その清らかさはかぎりもないが、

あまりに世の中からかけ離れた、
それゆゑの月の出か、
明るい眞(ま)近(ちか)な光である。
ああ、いま、せせらぐものに
何かのたよりがきこえさうだ。
さてもこの良夜(りやうや)に
言葉を失(な)くした
ひとつひとつの靈(たましひ)である。
近いやうでもまた
遠い銀と紫の世の中である。

李思訓

月は眞珠のやうに小(ちひ)さかつた、

高山の蔭である故、
金碧の畫堂も綠に見えた。
日中の事である。
李思訓は繪筆をとり、
幽かに心はうちふるへた。
あまりに細緻な自然である。
あまりに色が深過ぎる。
悲しいものは山と水、
遙かな點は雲に鳥。

老子

青の牛に白の車を挽かせて、
老子は幽かに坐つてゐた。

はてしもない旅ではある、
無心にして無爲、
飄飄として滯らぬ心、
函谷關へと近づいて來た。
ああ、人家が見える、
馭者は思はず車を早めたが、
何をいそぐぞ徐甲よと、
老子の微笑は幽かであつた。
相も變らぬ山と水、
深い空には晝の星、
道家の瞳は幽かであつた。

三

王摩詰

常無きものは山水、
人生のすがた、
竹林の琵琶の音、
香、
禪誦、
それゆゑに王摩詰、
水墨に、丹青に、
かうかうと遊んださうな、
ああ、さうなよ。

林泉の空

林泉のそばに陶器の榻がある。
榻はつめたくて白い、つやつやしてゐる。
誰か來て、今にも、
腰をかけさうな、
來てくれぬ方がいいとも思へる。
晝間の竹には風が動いて、
空には薄い綿雲が見える。
あ、星がまたたいた、一つ、
おお、あれこそ、昔の
幼い私ではなかつたか。

晩涼

細い金線を引く
支那風の二つ星、
また三つ星、
庭には婆娑とした芭蕉の叢葉、
葉蔭の榻には蛙が鳴いて、
鮮麗な今のわたしの晩涼です。
わたしは天文を觀、
また青い燈籠の灯に
草蟲の圖譜をひろげ、
更けては幽かな泉石の
魚のうごきを恐れます。

わたしの頭巾は青、
またその袍も青、
涼しければ涼しいなりで、
ああ、沈沈として寂びて了ふか。

木のあたま

あまりに氣ぶかい月明である。
むくりむくりとした木のあたまの
あまりに閑かな夜陰である。
いつも高いところに棲んで
いつも梢を瞰下してゐるわたしは
あの椎や樫や鉾杉の層が吸ひこむ
この青寂びた闇と月光をおそれる、

むくりむくりとした
どこまでも、むくりむくりとした。

水墨牡丹

大雅よ、あなたは水墨の牡丹花であるか、
豐かにして、而もこの色の簡素なことは、
むしろ禪意に近い墨の深さである。
この閑寂な山中の眞晝を
そよそよと通る微風に吹き溢れて、
苔蒸す岩根までも搖り動かすばかり、
あなたの牡丹は氣を專らに澄み沈んでゐる。
凡ては老莊の無爲に住して、
名利の外にうち寛いだ風懷の

いかにまた安らかに寂しく見えることぞ、
おお、まことに暢びやかに日永の氣韻は
點の山蜂をさへ空の一方に飛ばしてゐる。

竹田

樂しみ樂しみあなたは畫いた、
唐風の山水を、また花鳥を、
悠悠たるその無關心、
畢竟はあなた自ら美の恍惚にひたることではないか、
神を暢べ、氣をやすむることではないか、
樂しみ樂しみあなたは畫いた、
まことの遊びを幽かに爲た。

銀杏

銀杏は緑いろの實だ、
白い眼の形した殼、
あの稜をたたくと——
わたしは思ひ出す、小さな木の槌と臺砧とを、
お河童髮さんの昔を。

銀杏は緑いろの實だ、
火に寄せると金色の輝きをして
苦いほど焦げる。——
もひとつ作らう、小さな木の槌と臺砧とを、
また、秋風の夜を坐らう。

銀杏は綠いろの實だ。
ひとつひとつ叩いて、
さあ、ひとつひとつ燒かうよ、
わたしは作つた、小さな木の槌と臺砧とを、
おお、我子よ、坐らう。

銀杏は綠いろの實だ。
あの白い殼をたたくと。

千利休

利休が茶を愛したのは
茶の心を樂しんだのだ。

あの朝夕の閑雅な心。
茶よりも煙が慕はれる。

*

象を幽かに保つことは
心を幽かに澄ますことだ。
それゆゑ利休は坐つてゐた、
茶室の薄陽に微笑んでゐた。

時雨

時雨は水墨のかをりがする。
燻んだ浮世繪の裏、
金梨地の漆器の氣品もする。

わたしの感傷は時雨に追はれてゆく
遠い晩景の渡り鳥であるか、
つねに朝から透明な青空をのぞみながら、
どこへ落ちてもあまりに寒い雲の明りである。
時にはちりぢりと亂れつつも、
いつのまにやら時雨の薄墨ににじんで了ふ。

蘆雁

洲のはなの吹きさらしに影して、
かれらは四五羽の蘆雁であつた。
かれらは饗つてゐた、たまさかの陽の明りを、
つくづく眺めてゐた、遙かな雲ぎれの青みを、
時雨がうしろにほそく殘つてゐた。

かれらはそれにも心をひかれてゐた。
かれらは四五羽の蘆雁であつた、
大きな、けれども白い月の出を待つ
寒い四五羽の蘆雁であつた、
滿汐どきの、時をり啼きかはす蘆雁であつた。

山峽の良夜

なんといふ紫の
峽の良夜ぞ、
雪のつもつた竹、
林泉の石、
敗荷を閉ぢた氷の面。
鷭よ、朝から持ちつづけたこの闃けさを

少しでも、むざと、亂してくれるな。
月は宵から中天にあるが
あの片われの半面の深さ、
光をひそめた紫の濃さ、
ああ、その縁に銀星がまたたく、
三千年の昔のまたたきが。
鶴よ、林泉の雪に默んで
せめては仙家の祕藥を練つててくれ。

初秋の朝飯

正眼に觀入る
白芙蓉。

幽かに聽くは
潮のひびき。

秋はすずしき山水に
時たま涵るわがこころ。

白の朝飯、
白芙蓉。

今朝も身に染む
水しぶき。

凪

一

遠きもの
まづ搖れて、
つぎつぎに、
目に搖れて、
搖れ來るもの、
風なりと思ふ間もなし、
我いよよ搖られはじめぬ。

二

風吹けば風吹くがまま、
我はただ搖られ搖られつ。
搖られつつ、その風をまた、
わがうしろ遙かにおくる。

三

吹く風に搖れそよぐもの、
目に滿ちて、
翔る鳥、
ただ一羽、
弧は描けど、
搖れ搖れて、
まだ、空の中。

四

吹く風の道に、
驚きやまぬものあり、
光り、また暗みて
をりふし強く、急に強く、

光り、また暗む、
すべて秋、今は秋。

五

輝けど、
そは遠し、
尾花吹く風。

焚火

一

落葉焚けばおもしろ、
櫟の葉はふすふす。
萱の葉はちよろちよろ、

松の葉はぱちぱち。

二

ひとりで焚く落葉を
ひとりで嗅げばおもしろ、
山のにほひがする、
あの頃のにほひがする。

三

落葉焚き焚き、
ひとりあそぶこころの
何か果敢なくなりけり。
もひとつ強く燃さうよ。

四

くぬぎの燃ゆるにほひは
くぬぎの枯れし香ぞする。
ただそれだけの事さへ、
うれしや、冬はさみしや。

五

落葉焚き焚き、
ただ遠遠と見てゐつ。
赤い女松のまばらに、
をりふし明る日あたり。

六

落葉焚くかたへに
見つけてふともうれしや、
龍膽が蕾んでゐる。

二つづつふくらんでゐる。

七

萓がよう燃えるわ、
あたたかいぞ、あたたかいぞ、
と、云うては見れど、やつぱりさみしい。
默(だま)つてばかりゐずとも、何か云へ、お前も。

落葉松

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。

たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつづけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨(きりさめ)のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとささやきにけり。

六

からまつの林を出でて、
淺間嶺にけぶり立つ見つ。
淺間嶺にけぶり立つ見つ。

からまつのまたそのうへに。

七

からまつの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。

白金ノ獨樂

大正三年十二月初版・金尾文淵堂刊

白金ノ獨樂

感涙(カンルヰ)ナガレ、身ハ佛(ホトケ)、
獨樂(コマ)ハ廻レリ、指尖(ユビサキ)ニ。

カガヤク指ハ天ヲ指(サ)シ、
極(キハ)マル獨樂ハ目ニ見エズ。

圓轉、無念無想界、
白金ノ獨樂音(ネ)モ澄ミワタル。

掌

光リカガヤク掌（テノヒラ）ニ
金ノ佛ゾオハスナレ。

光リカガヤク掌ニ
ハツト思ヘバ佛ナシ。

光リカガヤク掌ヲ
ウチカヘシテゾロモスガラ。

究竟

紅(ベニ)耀(カガヤ)ケバ、金トナリ、
黒(クロ)極(キハ)マレバ、銀トナル。

内心ノラヂウムノ獨樂
光リツムレバ白金昇天。

日光

兩手(モロテ)ソロヘテ日の光掬(スク)フ心ゾアハレナル。
掬ヘド掬ヘド日の光、
光リコボルル、音モナク。

夏

近景ニ一本ノ葦(アシ)、
遠景ニ不二(フジ)ノ山、
不二ヨリモサラニ高ク、
新鮮ニ葦ハ戦(ソヨ)ゲリ。

ヤサイ

ギンノサカナノトビハヌル
ヤサイバタケニキテミレバ、
ギンノサカナヲトラヘムト、

ヤサイアワテテハヲミダス。

金

貧シサニ金ヲ借リ、
ソノ金ガ返サレズ。

キノフモケフモ、ソノ金ガ
燦然（サンゼン）ト天（テン）ニ光ル。

貧者

サハサリナガラ食（タ）ベズニハ

生キテキラレズ、御佛ヨ、
生キムガタメニハ蝗デモ
取ツテ食ブベシ、カガヤカニ。

薔薇

薔薇ノ木ニ
薔薇ノ花サク。
ナニゴトノ不思議ナケレド。

畑の祭

大正二年—三年に至る三崎詩集

大正九年八月白秋詩集第一卷初輯・アルス刊

崖の上の麥畑

眞赤なお天道さんが上らつしやる。やつこらさと
鍬を下ろすと、ケンケンケンケンケン……
鶺鴒めが鳴きくさる、
崖の上の麥畑、
天氣は快し、草つ原に露がいつぱいだで、
そこいら中ギラギラしてたまんねえ、
九右衞門さん、麥は上作だんべえ、
蠶豆ははちきれさうだ。
ええら、いい凪だな、沖ぢやまだ眠つてゐるだが、
俺ちの崖の下は眞蒼だ、
そうれ、また、さらさら、ざぶん、ざぶん、んん……

尖んがり岩に波がぶつかる、
怖かねえほど靜かぢやねえかよ、
まるで、はあ、鮑の殼見たいにチラチラするだね。

南風が吹きあげる。
やれ、やれ、今日も朝つぱらからむんむんするだぞ。
何でも構ふこたねえ、
胸をづんと張りきつてな、うんとかう息を吸ひ込んで見るだ。
熟れ返つた麥の穗がキンラキラして、
うねつたり、凹んだり、
扁平たく押つかぶさると、
阿魔女でも、何でも、はあ、壓つ倒してやりたくなるだあ。

眞赤なお天道さんが燃えあがる、
雲がむくむく噪き出す、

狂ひ出すと、吃驚したたか
畔の仔牛が鳴き出す、
わあといふ聲がする、
村中で穀物を扱き出す、
ぢつとして居らんねえ、
俺ちも豆でも捥るべえ。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ぐんぐん押しわけてゆくてえと、
たまんねえだぞ……素つ裸で、
地面にしつかり足をつける、うんと踏んばろ、
まん圓いお天道さんが六角に尖つて
四方八方眞黄色に光り出す。
そこで、俺ちも小便をする。

赤ちやけた麥と蠶豆、
ほうれ見ろ、旦那さあが、
手に一杯何だか擴げて、
讀んで行かつしやるだ、旦那さあ、
大けえ新聞だね、東京の新聞けえ、
紙がぷんぷん匂ふだ。

おやあ、蟬が鳴いてるだな、
どうしただか、これ、ふんとに奇異だぞ、
熟れ返つた麥ん中で眞面目くさつて鳴いてるだ、
あつはつはつ……これ、ふんとに不思議だぞ、
何でも、はあ、地面にかじりついて
一所懸命鳴いてるだ。

夏が來ただな、夏が來ただな、

海から山から夏が來ただな。

あつはつはつはつ……
あつはつはつはつ……

遠樹

遠樹は金の甲なり
明るけれども影ふかく
高きにをれども眼に低し
ただ秋風ぞ彼を吹く。

遠樹にかかる三日の月
遠樹にのこる晝の雨

遠樹の暮れてかがやくは
かうかうとしてかつ寂し。

遠樹のかげをゆく人は
身も金色に光るらむ
遠樹の雨を眺むれば
幽けき煙、野にぞ沁む。

遠樹の上にちらばるは
これ釣舟の銀の櫂
消ゆがにしては、またいくつ
光りて鳥も飛びゆけり。

遠樹にかかる三日の月
遠樹にのこる晝の雨

遠樹の空にわだつみの
波かぎりなくうちつづく。

遠樹の赤さ、野の暗(くら)さ
かうかうと吹く秋の風。
遠望の中、かげゆれて
祈るがごとし、いつくしく。

遠樹は遂に遠樹なり
明るけれどもゆめふかく
高きに動(ゆら)げどなほ重し
遠樹の背(せ)にぞ虹(にじ)かかる。

新月

斷崖の松の木に
月ほそくかかりたり、
ほそき月、
金無垢の月。

入海の波間にも
また、　月はしづきゆく、
沈沈と
金の鉤。

金無垢のするどさよ

絹漉の雨ののち、
しんじつに
走りいづるその蒼さ。

島黒く、海黒き
眞の闇、
舟ひとつすすみゆく、
そのうへにほそき月。

なにかわかかね、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる。
　虔の極まり。

闇の夜は、斷崖も、松の木も、

かげわかず、ゆく舟も見えわかず、
ただ光るほそき月、
金無垢のほそき月。

雨中小景

雨はふる、ふる雨の靄がくれに
ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ
銀鼠にからみゆく古代紫、
その空に城ケ島近く横たふ。

なべてみな空なりや、海の面に
輪をかくは水脈のすぢ、あるは離れて
しみじみと泣きわかれゆく、

その上にあるかなきふる雨の脚。
遙かなる岬には波もしぶけど、
絹漉の雨の中、蜑小舟ゆたにたゆたふ。
棹あげてかぢめ採りゐる
北齋の蓑と笠、中にかすみて
一心に網うつは安からぬけふ日の惑ひ。

さるにてもうれしきは浮世なりけり。
雨の中、をりをりに雲を透かして
さ緑に投げかくる金の光は
また雨に忍び入る。音には刻めど
絶えて影せぬ鶺鴒のこゑをたよりに。

海雀

海雀、海雀、
銀の點點、海雀、
波ゆりくればゆりあげて、
波ひきゆけばかげ失する、
海雀、海雀、
銀の點點、海雀。

野茨に鳩

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。
春はふけ、春はほうけて、
古ぼけた草家の屋根で、よ。
日がな啼く、白い野鳩が、
啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
庭も荒れ、荒るるばかしか、
人も來ぬ雀が蔭に、よ。
茨が咲く、白い野茨が、
咲いても、知られず、散つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

何を見ても、何を爲(し)てもよ、
ああいやだ、寂しいばかり、よ。
椅子が搖れる、白い寢椅子(ねいす)が、
寢椅子もゆさぶりや折れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

日は永い、眞晝(まひる)は深い、
風は吹いても盡きず、よ、
ただだるい、だるい、ばかり、よ。
どうにもかうにも倦(う)んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。

空は、空は、いつも蒼いが、

わしや元の嬰兒ぢやなし、よ。
世は夢だ、野茨の夢だ、
夢なら、醒めたら消えて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
氣はふさぐ、身體は重い、
おおままよ、ねんねが小椅子、よ。
子供げて、搖れば搖れよが、
溜息ばかりが搖れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
昨日まで、堪へても來たが、
明日ゆゑに、今日は暗し、よ。

人もいや、聞くもいやなり、
それでも獨(ひとり)ぢや泣けて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
心から、ようも笑へず、
さればとて、泣くに泣けず、よ。
煙草(たばこ)でも、それぢや、ふかそか、
煙草も煙になつて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
春だ、春だ、それでも春だ。
白い鳩が啼いてほけて、よ、
白い茨(ばら)が咲いて散つて、よ、

かうしてけふ日も暮れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
日は暮れた、昔は遠い、
世も末だ、傾ぶきかけた、よ。
わしや寂(さ)びる、いのちは腐(くさ)る、
腐れていつかと死んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
ほろほろ、ほろろん、
おお、ほろほろ。……

（大正七年・小田原お花畑にての暮春吟）

雪と花火

東京景物詩

公園の薄暮

ほの青き銀色の空氣に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしばしさまかへぬほど、
ふくらなる羽毛頸卷のいろいろなやましく女ゆきかふ。

つつましき枯草の濕るにほひよ……
圓形に、あるは楕圓に、
劃られし園の配置の黄にほめき、靄に三つ四つ
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。

春はなほ見えねども、園のこころに

いと甘き沈丁の苦き蕾の
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし靈のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる電車のきしり……
凋れたる調和にぞ修道女の一人消えさり、
裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は
疲れたる硝子より弊私的里の瞳を放つ。

いづこにかすずろげる春の暗示よ……
陰影のそこここに、やや強く光劃りて
息ふかき弧燈枯くさの園に歎けば、
面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづらふ。

朧げのつつましき匂のそらに、

なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり、
新しき月光の沈丁に沁みも冷ゆれば
官能の薄らあかり銀笛の夜となりぬる。

夜の官能

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
酸のごとき星あかりさだかにはそれとわかねど
濃く淡き溝渠の陰影に、
青白き胞衣會社ほのかににほひ、
窓多く、而もみな閉したる眞四角の煙艸工場の
煙突の黑みより灰ばめる煤と湯氣なびきちらばふ。
橋のもと、暗き沈默に

舟はゆく……
なごやかにうち青む砥石の面を
いと重き剃刀の音もなく滑るごとくに
舟はゆく……ゆけど聲なく
ありとしも見えわかぬ棹取の杞憂深げに、
ただ黄なる燈火ぞのぼりゆく……孤兒の頼りなき眼か。

つつましき尿の香の滲み入るほとり、
腐れたる酒類の澱み濁りて
そこここの下水よりなやみしみたり、
白粉と湯垢とのほのめく闇にも
青き芽の春の草かすかににほふ。

濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
かへりみすれば

いと黒く、はた、遠き橋のいくつの
そのひとつ青うきしろひ
神經の衰弱にぞ絶間なく電車過ぎゆき、
正面なる新橋の天鵞絨の空の深みに
さまざまの電氣燈の裝飾、
そを脱けて紫の弧燈にほやかにひとつ濕れる。
あはれあはれ、爛壞の前の官能のイルミネエション。

しかはあれども、
濕潤ふかき藍色の夜の暗さ……
溝渠の闇の中、病院の舟は消えゆき、
青白き胞衣會社にほふあたりに、
整はぬ鶯ぞしみらにも鳴きいでにける。

露臺

やはらかに浴(ゆあ)みする女子のにほひのごとく、
暮れてゆく、ほの白き露臺(バルコン)のなつかしきかな、
黄昏(たそがれ)のとりあつめたる薄明(うすあかり)
そのもろもろのせはしなきどよみのなかに、
汝(な)は絶えず來(きた)る夜(よ)のよき香料(かうれう)をふりそそぐ。
また古き日のかなしみをふりそそぐ。

汝がもとに兩手(もろて)をあてて眼病の少女はゆめみ、
鬱金香(うこんかう)くゆれるかげに忘られし人もささやく。
げに白き椅子の感觸(さはり)はふたつなき夢のさかひに、
官能の甘き頸(うなじ)を捲(ま)きしむる悲愁(かなしみ)の腕(かひな)に似たり。

いつしかに、暮るとしもなき窓あかり、
七月の夜の銀座となりぬれば
静こころなく呼吸しつつ、柳のかげの
銀線の瓦斯の點りに汝もまた優になまめく、
四輪車の馬の臭氣のただよひに黄なる夕月
もの甘き花梔子の薫してふりもそそげば、
病める兒のこころもとなきハモニカも物語のなかに起りぬ。

雜艸園

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、――
靈の雜艸園の白日はかぎりなく傷ましきかな。
たとふればマラリヤの病室にふりそそがれし

香水と消毒劑と、……窻の外なる蜜蜂の巣と、……
そのなかに絕えず恐るる弊私的里の看護婦の眼と、
霖雨後の黃なる光を浴びて蒸す四時過ぎの歎に似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに黏りたる瓦斯の灯の病める瞳よ。
かくてまた踏み入りがたき雜艸の最も淫れしあるものは
肥滿りたる、頸輪をはづす主婦の腋臭のごとく蒸し暑く、
悲しき莖のひと花のぺんぺん草に縋りしは、
藥罎もちて憩へる雜種兒の公園の眼をおもはしむ。
また、緩やかに夢みるごときあるものは
午後二時ごろのCaféにVerlaineのあるごとく、
ことににくきは日光が等閑になすりつけたる
思ひもかけぬ、物かげの新しき土の色調。
またある草は白猫の柔毛の感じ忘れがたく、

いとふくよかに溫臭き殘香の中に吐息しつ。
石鹸の泡に似て小さく、簇り青むある草は
ひと日浴みし肺病の女の肌を忍ぶごとく、
洋妾めける雁來紅は
吸ひさしの卷煙草めきちらぼひて、しみらに薰ゆる
朝顏の萎みてちりし日かげをば見て見ぬごとし。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに瞬ける瓦斯の灯の病める瞳よ。

あるものは葱の畑より忍び來し下男のごとく、
またあるものは轢かれむとして助かりし公證人の女房が
甘蔗のなかに青ざめて佇むごとき匂しつ。
ことに正しきあるものはかかる眞晝を
饐え白らみたる鳥屋の外に交へる鷄をうち目守る。

噫、かかるもろもろの匂のなかにありて
藥草の香はひとしほに傷ましきかな。
哀れ、そは三十路女の面もちのなにとなくさびしきごとく、
活動寫眞の小屋にありて悲しき銀笛の音の消ゆるに似たり。

見よ、かかる日の眞晝にして
氣遣はしげに黃ばみゆく瓦斯の灯の病める瞳よ。

あはれ、また
知らぬ間に懶きやからはびこりぬ。
ここにこそ恐怖はひそめ。かくてただ盲人の親は寢そべり、
剃刀持てる白痴兒は匍匐ひながら、
こぼれたる牛乳の上を、毛氈を、近づき來る思ひあり。
またその傍に、なにとも知れぬ匂して、

詮すべもなく降りゆく、さあれ樂しくおもしろき
やぶれかかりし風船の籠に身を置く心あり。
あるは、また、かげの濕地に精液のにほひを放つ草もあり。

見よ、かかる日の眞晝にして、
氣遣はしげに青ざめし瓦斯の灯の病める瞳よ。

惱ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、
靈の雜艸園の白日の聲もなきかがやかしさを、
時をおき、搖り轟かし、黑煙たたきつけつつ、
汽車飛び過ぎぬ、かくてまたなにごともなし……。

心とその周圍

I　窻のそと

わが窻のそと
黄なる實のおよんどんのちまめは小さなる光の簇をつくり、
葉かげの水面は銀色の靜寂を織る。
白くして惱める眼鏡橋のうへを
鐵輪を走らしつつ外科醫院の兒は過ぎゆき、
氣の狂ひたる助祭は言葉なく歩み來る。
鐘を撞け、鐘を撞け、
恐ろしき銀色の鐘を……

この時、近郊を殺戮したる白人の一揆は
更にこの靜かにして小さなる心の領内を犯さんとし、
すでにその鎗尖のかがやきはかなたの丘の上に閃めけり。

正午過ぎ……　一分……　二分……　三分……
日は光り、そよとの風もなし。

ある日、わが窗の硝子のしたに、
覆されたる蜜蜂の大きなる巣激しく臭ひ、
その周圍に數かぎりなき蜂の群音たてて光り耀き、
粗末なる木の函へすべり入り、匍ひめぐる。
かがやかしき歡喜と悲哀！
すべてこの銀色の光のなかに
太くしてむくつけき黒人の手ぞ
働ける……　甘き甘きあるものを掻きいださんとするがごとく。

その前に負傷したる敵兵三人、——
あるものは白き布にて右の腕を吊したり——
口に燒けたる絕望の顏をよせて
そこはかとなきかかる日の鄕愁に惱むがごとく
珍かにうち眺めたる……足もとの黃色なる花
濕りたる土の香のさみしさに晷りつつうち凋る。

鐘は鳴る……銀色の敎會の鐘……
硝子窻のなかには
薄色の靑き眼鏡をかけたる女、
かりそめのなやみにほつれたる髮かきあげて、
藥罎載せたる圓卓のはしに肱つきながら
金字見ゆるダンヌンチオの稗史を閉し、
靜かなる杏仁水の香ひにしみじみと聽き恍れてあり。

ああ、午後三時の郷愁(ノスタルヂア)……

Ⅱ　銀色の背景

わが悲哀(かなしみ)の背景(バック)は銀色なり。
そは五月の葱畑(ねぎばたけ)のごとく、
夏の夜の「若竹(わかたけ)」の銀襖(ぎんぶすま)のごとく青白き瓦斯(がす)に光る。
そのまへに、――
弊私的里(ヒステリイ)の甚しきは
私通(しつう)したる泪夫藍(さふらん)色の女の
聲もなき白痴(はくち)の児をば抱きながら入日(いりひ)を見るがごとくに歩み、
かの苦(にが)く青くかなしき愁夜曲(ノクチユルヌ)……
ある夜(よ)のわれは恐ろしくして美しき竹本小土佐(たけもとことさ)の
「合邦(がつぱう)」の玉手御前(たまてごぜん)の悲歎(なげき)をば弾語(ひきがたり)する風情(ふぜい)に坐り、

暗き暗き鬱悶は
鈍銀の引かれゆく幕の前に、指組める「仁木」のごとく、
隈青き眼の光、煙とともにスッポンの深き恐怖よりせりあがる。……

何時も何時もわが悲哀の背景には銀色の密境ぞ住む。
そのなかに鳴きしきる蟲の音よ、
匂高き空氣の迅き顫動、
太棹と、鋭き拍子木、
あああ、わが凡ての官能は盲ひんとして靜かに光る。

III　神經の凝視

日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……
ゆき馴れし一本の楡のもと、半壞れし長椅子に、

恐ろしき病室を抜けいでたるわがこころの神經の疑ふかき凝視……

足もとの、そこここの小さき花は
長く長く抱擁したるあとの黄色なる興奮に似て
光り……なげき……吐息し……
沈默したる風は
生前の日の遺言狀の祕密のごとくに刺草の間に沈み、
美しき絕望のごとくたまさかに蜥蜴過ぎゆく。
近郊の鐘は鳴る……修道院晚餐の鐘……

神經の澄みわたる凝視はつづく——
その青くして何物にも吸ひ取らるるがごとき瞳は
身をすりよする異母妹の性の恐怖より逃れんとし、
親しき友人の顏に陋しき探偵の笑を恐れ、
色黄なる醜き惡緣の女を殺さんとし、

さらにわが生を力あらしめんがために砒素を醫局の棚より盜み、
終にまた響も立てぬ靈の深緑の瞳にうち吸はれ、
わが心の深淵に突き落されし處女の銀の咽びをきく。

この時、病院の青白き裏口の戸に佇める看護婦は
携へし鳥籠の青き小鳥の鳴くこゑをさびしみながら、
角笛吹ける乘合馬車の遠き遠き黄のかがやきをなつかしむ。
日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……

物理學校裏

Borum. Bromun. Calcium.
Chromium. Manganum. Kalium. Phosphor.
Barium. Iodium. Hydrogenium.

Sulphur. Chlorum. Strontium.……
（寂しい聲がきこえる、そして不思議な……）

日が暮れた、淡い銀と紫――
蒸し暑い六月の空に
暮れのこる棕櫚の花の惱ましさ。
黄色い、新しい花穗の聚團が
暗い裂けた葉の陰影から噎せるやうに光る。
さうして深い吐息と腋臭とを放つ、
齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興奮の黄。

$C_2H_2O_2N_2+NaOH=CH_4+Na_2CO_3$……
蒼白い白熱瓦斯の情調が曇硝子を透して流れる。
角窓のそのひとつの内部に
光のない青いメタンの焔が燃えてるらしい。

肺病院のやうな東京物理學校の淡い青灰色の壁に
いつしかあるかなきかの月光がしたたる。

Tîn……Tîn……Tîn. n. n. n……Tîn. n……
　tire……tire……tîn. n. n. n……Shan……
ti……ti……ti……ti……tote……tsn. n……Shan. n. n. n. n……

靜かな惱ましい晩、
何處かにお稽古の琴の音がきこえて、
崖下の小さい平家の亞鉛屋根に
コルタアが青く光り、
柔らかい草いきれの底にLampの黄色い赤みが點る。
その上の、見よ、すこしばかりの空地には
濕つた胡瓜と茄子の鄙びた新らしい臭が
惶ただしい市街生活の哀愁に纏れる……
汽笛が鳴る。四谷を出た汽車のCadenceが近づく……

暮れ惱む官能の棕櫚
そのわかわかしい花穗の臭が暗みながら噎ぶ、
齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興奮の黄。

寂しい冷たい教師の聲がきこえる、そして不思議な……
そこここの明るい角窻のなかから。

Sin……Cosin……Tan……Cotan……Sec……Cosec……
　etc……
Ion. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.
Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の火花
攝氏、華氏、光、Bunsen, Potential, or, Archimedes, etc, etc……
棕櫚のかげには野菜の露にこほろぎが鳴き、
無意味な琴の音の稚びた Sentiment は

何時までも何時までもせうことなしに續いてゆく。

汽笛が鳴る……濠端の淡い銀と紫との空に
停車つた汽車が蒼みがかつた白い湯氣を吐いてゐる。
靜かな三分間。

惱ましい棕櫚の花の官能に、今、
蒸し暑い痲痺がもつれ、
暗い裂けた葉の縁から銀の憂鬱がしたたる。
その陰影の捕捉へがたき Passion の色、
齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興奮の黄。

Neon. Flourum. Magnesium.
Natrium. Silicium. Oxygenium.
Nitrogenium, Cadmium. or, Stibium.

etc, etc……

柳の佐和利

ほの青い雪のふる夜に、
電車みちを、
醉つて、醉つて、醉つぱらつてさ、ひよろひよろと、
ふらふらと、凭れかかれば、硝子戸に。
Yōi!……Yōi!……Yōitona!……

ほの青い雪はふり、
店のなかではしんみりと柳の佐和利、
醉つて、醉つて、醉つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよろと首をふれば太棹が……

Yōi！……Yōi！……Yōitona！……

ほの青い雪の夜の
蓄音機とは知つたれど、きけばこの身が泣かるる。
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ひよろひよろと、
ふらふらと投げてかかれば、その咽喉が……
Yōi！……Yōi！……Yōitona！……

ほの青い雪のふる
人ひとり通らぬこの雪に、まあなんとした、
酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ふらふらと、
ひよろひよろと、しやくりあぐれば誰やらが、
Yōi！……Yōi！……Yōitona！……

おかる勘平

おかるは泣いてゐる。
長い薄明(うすあかり)のなかでびろうど葵(あふひ)の顫(ふる)へてゐるやうに、
やはらかなふらんねるの手ざはりのやうに、
きんぽうげ色の草生(くさぶ)から晝の光が消えかかるやうに、
ふはふはと飛んでゆくたんぽぽの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は盡きぬ、
勘平(かんぺい)さんが死んだ、勘平さんが死んだ、
わかい綺麗な勘平さんが腹切つた……
おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、
麹室(かうぢむろ)に玉葱(たまねぎ)の咽(む)せるやうな強い刺激だつたと思ふ。

やはらかな肌ざはりが五月ごろの外光のやうだつた、
紅茶のやうに熱つた男の息、
抱擁められた時、晝間の鹽田が青く光り、
白い芹の花の神經が、鋭くなつて眞蒼に凋れた。
別れた日には男の白い手に煙硝のしめりが沁み込んでゐた、
駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を切つてゐた……

その勘平は死んだ。

おかるは溫室のなかの孤兒のやうに、
いろんな官能の記憶にそそのかされて、
樂しい自身の愉樂に耽けつてゐる。
(人形芝居の硝子越しに、あかい柑子の實が秋の夕日にかがやき、黃色
く霞んだ市街の底から河蒸汽の笛がきこゆる。)

おかるは泣いてゐる。
美しい身振(みぶり)の、身も世もないといふやうな、
迫つた三味(しやみ)に連られて、
チョボの佐和利(さわり)に乗つて、
泣いて泣いて、溺(おぼ)れ死(じに)でもするやうに
おかるは泣いてゐる。

（色と香(にほ)ひと音楽と。
勘平なんかどうでもいい。）

槍持

槍は錆(さ)びても名は錆びぬ。
殿(との)につきそふ槍持(やりもち)の槍の穂(ほ)尖(さき)の悲しさよ。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと、振れ振れ、白鳥毛。

けふも馬上の寛濶に、
殿は伊達者の美い男、
三國一の備後樣、
しんととろりと見とれる殿御。
槍は槍持、銀なんぽ。
供の奴さへこのやうに、あれわいさの、これわいさの、取りはづす、
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は錆びても名は錆びぬ。
殿のお微行、近習まで
身なりくづした華美づくし。

槍は九尺の銀なんぽ。
けふも酒、酒、明日もまた、
通ふしだらの浮氣づら。
わたる日本橋ちらちらと、雪はふるふる。日は暮れる。
やあれ、やれ、冷たしやの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと、振れ振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと
河岸の問屋の灯が見ゆる。
さてもなつかし、飛ぶ鷗、
壁のしたには廣重の紺のぼかしの裾模様。
殿の御容量に、ほれぼれと、
わたる日本橋、槍のさき。

槍は擔げど、空のそら、澁面つくれど供奴、
ぴんとはねたる附髭に、雪はふるふる。日は暮れる。
やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと、振れ振れ、白鳥毛。

槍は錆びても名は錆びぬ。
殿につきそふ槍持の槍の穗さきの悲しさよ。
いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男。
さぞや世間の取沙汰に
浮かれ騷ぐも女なら、
そこらあたりの道すぢの紺の暖簾も氣がかりな。
槍は九尺の銀なんぽ。

槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ故。
さりとは、さりとは、供奴（ともやつこ）、
雪はふるふる。日は暮れる。
やあれ、やれ、しよんがいなの、槍のさき。

忠彌

雪はちらちらちらふりしきる。
城の御濠（おほり）の深みどり、
雪を吸ひ込む舌うちの
しんしんと沁（し）むたそがれに、
鴨（かも）の氣弱（きよわ）がかきみだす
水の表面（うはべ）のささにごり、

知るや知らずや、それとなく
小石投げつけ、——
ひつそりと底のふかさをききすます
わかき忠彌（ちゆうや）か、わがおもひ。

君が祕密の日くれどき、
ひとり心につきつめて
そつとさぐりを投げつくる
深き恐怖（おそれ）か、わが涙——
千萬無量（せんまんむりやう）の瞬間（たまゆら）に
雪はちらちらふりしきる。

キャベツ畑の雨

冷びえと、雨が、狹霧にふりつづく、
キヤベツのうへに、葉のうへに。
雨はふる、冬のはじめの乳緑の
キヤベツの列に、葉の列に。

あまつさへ、柵の網目の鐵條に
白い鳥奴が鳴いてゐる。
雨はふる、くぐりぬけてはいきいきと、
色と香ひを嗅ぎまはる。

ささやかな水のながれは北へゆく。
キヤベツのそばを、葉のしたを、
雨はふる、路もひとすぢ、川下の
街も新らし、石の橋。

キャベツ畑のあちこちに
かがみ、はたらき、ひとかかへ
野菜かついで走るひと、
雨はふる。けふもあをあを夏帽子。

小父さんが來る、眞蒼に、脚も顫へて。
「お早うがんす。」山楂子の芽もこはごはと、
泥にまみるる、立ちばなし。
雨はふる。しつかと握る水藥の黄色の罎の鮮やかさ。
「阿魔つ子がね、昨夜さ、
いいらぶつ吃驚げた眞似しでかし申しての、お前さま。」
雨はふる。光つては消える。剃刀で
咽喉を突いた女の頬。
「だけんど、どうかかうか生きるだらうつて、

醫者どんも云ゃんしたから。」まづは安心と軍鷄屋の小父さん、
胸をさすればキャベツまで、
ほつと息する葉の光。
鳥が鳴いてる……冬もはじめて眞實に
雨のキャベツによみがへる。
濡れにぞ濡れて、眞實に
色も香ひもよみがへる。

新らしい、しかし、冷たい朝の雨、
キャベツ畑の葉の光。
雨はふる。生きて滴る乳緑の
キャベツの涙、葉のにほひ。

邪宗門

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蠻の桟留縞を、はた、阿剌吉、珍酡の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖磔、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅葦僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、

ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。
かの美しき越歷機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、
腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ、
はた、羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる假名は
美くしき、さいへ悲しき歡樂の音にかも滿つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すとも
惜しからじ、願ふは極祕、かの奇しき紅の夢、
善主麿、今日を祈に身も靈も薫りこがるる。

室內庭園

晩春の室の內、
暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……
そのもとにあまりりす赤くほのめき、
やはらかにちらぼへるヘリオトロオプ。
わかき日のなまめきのそのほめき、靜こころなし。

盡きせざる噴水よ……
黃なる實の熟るる草、奇異の香木、
その空にはるかなる硝子の青み、
外光のそのなごり、鳴ける鶯、
わかき日の薄暮のそのしらべ、靜こころなし。

いま、黒き天鵝絨の
にほひ、ゆめ、その感觸……　噴水に縺れたゆたひ、
うち濕る革の函、饐ゆる褐色、
その空に暮れもかかる空氣の吐息……
わかき日のその夢の香の腐蝕、靜こころなし。

三層の隅か、さは
腐れたる黄金の縁の中、自鳴鐘の刻み……
ものなべて悩ましさ、盲ひし少女の
あたたかに匂ふかき感覺のゆめ、
わかき日のその靄に音の響く、靜こころなし。

晩春の室の內、
暮れなやみ、暮れなやみ、噴水の水はしたたる……

そのもとにあまりりす赤くほのめき、
甘く、また、ちらぼひぬ、[illegible]ヘリオトロオプ。
わかき日は暮るれども、夢はなほ靜こころなし。

濃霧

濃霧はそそぐ……腐れたる大理の石の
生くさく吐息するかと蒸し暑く、
はた、冷やかに官能の疲れし光——
月はなほ夜の氛圍氣の朧なる恐怖に懸る。

濃霧はそそぐ……そこここに蟲の神經
鋭く、甘く、壓しつぶさるる嘆きして
飛びもあへなく耽溺のくるひにぞ入る。

薄ら闇、盲唖の院の角硝子暗くかがやく。

濃霧はそそぐ……さながらに戰く窻は
亞剌比亞の魔法の館の薄笑。
痲痺藥の酸ゆき香に日ねもす噎せて
聾したる、はた、盲ひたる圓頂閣か、壁の中風。

濃霧はそそぐ……甘く、また、重く、くるしく、
いづくにか凋れし花の息づまり。
苑のあたりの泥濘に落ちし燕や、
月の色半死の生に惱むごとただかき曇る。

濃霧はそそぐ……いつしかに蟲も盲ひつつ
聾したる光のそこにうち痺れ、
啞とぞなる。そのときにひとつの硝子

幽魂の如くに青くおぼろめき、ピアノ鳴りいづ。

濃霧はそそぐ……数の、見よ、人かげうごき、
闌くる夜の恐怖か、痛きわななきに
ただかいさぐる手のさばき――霊の弾奏、
盲目弾き、唖と聾者円ら眼に重なり覗く。

濃霧はそそぐ……聲もなき聲の密語や。
官能の疲れにまじるすすりなき
霊の震慄の音も甘く聾しゆきつつ、
近き野に喉絞めらるる淫れ女のゆるき痙攣。

濃霧はそそぐ……香の腐蝕、肉の衰頽、――
呼吸深く哥囉仿謨や吸ひ入るる
朧たる暑き夜の魔睡……重く、いみじく、

音もなき盲啞の院の氛圍氣に月はしたたる。

赤き花の魔睡

日は眞晝、ものあたたかに光素の
波動は甘く、また、緩く、戸に照りかへす、
その濁る硝子のなかに音もなく、
哥羅仿謨の香ぞ滴る……毒の譃言……

遠く聽く、電車のきしり……
……棄てられし水藥のゆめ……
やはらかき猫の柔毛と、蹠の
ふくらのしろみ惱ましく過ぎゆく時よ。

窓の下、生の痛苦に只赤く、戰ぎえたてぬ草の花
亞鉛の管の
濕りたる筧のすそに……いまし魔睡す……

曇日

曇日の空氣のなかに、
狂ひいづる樟の芽の鬱憂よ……
そのもとに桐は咲く。
Whiskyの香のごときしぶき、かなしみ……

そこここにいぎたなき駱駝の寢息、
見よ、鈍き綿羊の色のよごれに

饐えて病む藁のくさみ、
その濕る泥濘に花はこぼれて
紫の薄き色鋭になげく……
はた、空のわか葉の威壓。

いづこにか、またもきけかし。
餌に饑ゑしペリカンのけうとき叫、
山猫のものさやぎ、なげく鶯、
腐れゆく沼の水蒸すがごとくに。

そのなかに桐は散る……Whisky の強きかなしみ……

もの甘き風のまた生あたたかさ、
猥らなる獸らの圍内のあゆみ、
のろのろと枝に下るなまけもの、あるは、貧しく

眼を据ゑて毛蟲啄む嗟嘆のほろほろ鳥よ。

そのもとに花はちる……桐のむらさき……

かくしてや日は暮れむ、ああひと日。
病院を逃れ來し患者の恐怖、
赤子らの眼のなやみ、笑ふ黑奴、
醉ひ痴れし遊蕩兒の縱覽のとりとめもなく。

その空に桐はちる……新しきしぶき、かなしみ……

はたや、また、園の外ゆく……
軍樂の黑き不安の壞れ落ち、夜に入る時よ。
やるせなく騷ぎいでぬる鳥獸、
また、その中に、

狂ひいづる北極熊の氷なす戰慄の聲。

その闇に花はちる……Whiskyの香の頻吹……桐の紫……

接吻の時

薄暮か、
日のあさあけか、
晝か、はた、
ゆめの夜半にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈
赤き震慄の接吻にひたと身顫ふ一刹那。

あな、見よ、青き大月は西よりのぼり、
あなや、また瘧病む終の顫して
東へ落つる日の光、
大空に星はなげかひ、
青く盲ひし水面には藥香にほふ。

あはれ、また、わが立つ野邊の草は皆色も干乾び、
折り伏せる人の骸の夜のうめき、
人靈色の
木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。

かくて早や、落穗ひろひの農人が寒き瞳よ。
歡樂の穗のひとつだに殘さじと、
はた、刈り入るる鎌の刃の痛き光よ。
野のすゑに獸らわらひ、

血に饐えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、
二人がほかの靈のありとあらゆるその呪詛。

朝明か、
死の薄暮か、
晝か、なほ生れもせぬ日か、
はた、いづれともあらばあれ。

われら知る、赤き唇。

濁江の空

腐れたる林檎の如き日のにほひ
圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む
晩春の濁重たき靄の內、
ふと、カキ色の輕氣球くだるけはひす。

遠方の曇れる都市の屋根の色
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くも聽かむ、
濁江のねぶたき、あるは、やや赤き
にほひの空のいづこにか洩るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
あかるともなき灰紅の帆のふくらみに
傳へくる潛水夫が作業にか、
饐えたる吐息そこはかと水面に黃ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。
日暮どき、入日に濁る靄の内、
また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。

蜜の室

薄暮の潤みにごれる室の内、
甘くも腐る百合の蜜、はた、靄ぼかし
色赤きいんくの鬢のかたちして
ひそかに點る豆らんぷ息づみ曇る。
『豐國』のぼやけし似顔生ぬるく、
曇硝子の窓のそと外光なやむ。

ものの本、あるはちらぼふ日のなげき、
暮れもなやめる靈の金字のにほひ。

接吻の長き甘さに倦きぬらむ。
そと手をほどき、靄の内さぐる心地に、
色盲の瞳の女うらまどひ、
病めるペリカンいま遠き濕地になげく。

かかるとき、おぼめき摩る Violon の
なやみの絃の手觸のにほひの重さ。
鈍き毛の絨氈に甘き蜜の闇
澱み饐えつつ……血のごともらんぷは消ゆる。

謀叛

ひと日、わが精舎の庭に、
晩秋の静かなる落日のなかに、
あはれ、また、薄黄なる噴水の吐息のなかに、
いとほのにギオロンの、その絃の、
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火と懺悔のくゆり
ほのぼのと、廊いづる白き衣は
夕暮に言もなき修道女の長き一列。
さあれ、いま、ギオロンの、くるしみの、
刺すがごと火の酒の、その絃のいたみ泣く。

またあれば落日の色に、
夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、
さらになほ歌もなき白鳥の愁のもとに、
いと強き硝藥の、黑き火の、
地の底の導火燬き、ギオロンぞ狂ひ泣く。

跳り來る車輛の響、
毒の彈丸、血の烟、閃めく刃、
あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舍も、空も。
紅の、戰慄の、その極の
瞬間の叫喚燬き、ギオロンぞ盲ひたる。

序樂

ひと日、わが想の室の日もゆふべ、
光、もののね、色、にほひ――聲なき沈默、
徐にとりあつめたる室の内、いとおもむろに、
薄暮のタンホイゼルの譜のしるし
ながめて人はゆめのごとほのかにならぶ。

壁はみな鈍き愁ゆなりいでし
象の香の色まろらかに想鎖しぬれ、
その隅に瞳の色の窓ひとつ、玻璃の遠見に
冷えはてしこの世のほかの夢の空
かはたれどきの薄明ほのかにうつる。

あはれ、見よ、そのかみの苦惱むなしく
壁はいたみ、圓柱熔けくづれて
朽ちはてし熔岩に埋るるポンペイを、わが幻を。
ひとびとはいましゆるかに絃の弓、
はた、もろもろの調樂の器をぞ執る。

暗みゆく室内よ、暗みゆきつつ
想の沈默重たげに音なく沈み、
そことなき月かげのほの淡くさし入るなべに、
はじめまづヸオロンのひとすすりなき、
鈍色長き衣みな瞳をつぶる。

燃えそむるヴヱスヸアス、空のあなたに
色新しき紅の火ぞ噴きのぼる。

廢れたる夢の古塚、さとあかる我室の内、
ひとときに渦卷きかへす序のしらべ、
管絃樂部のうめきより夜には入りぬる。

冷めがたの印象

あわただし、旗ひるがへし、
朱の色の驛遞馬車跳りゆく。
曇日の色なき街は
清水さす石油の噎、
轢かれ泣く停車場の鈴、溝の毒、
晝の三味、鑢磨る歌、
茴香酒の青み泡だつ火の叫、

絶えず眩めく白楊、遂に疲れて
マンドリン奏でわづらふ風の群、
あなあはれ、そのかげに乞食ゆきかふ。

くわと來り、燃えゆく旗は
死に墮つる夏の光のうしろかげ。

灰色の亞鉛の屋根に、
青銅の擬寶珠の錆に、
また寒き萬象の愁のうへに、
爛れ彈く猩紅熱の火の調、
狂氣の色と冷めがたの疲勞に、今は
ひた嘆く、悔と、惱と、戰慄と。

あかあかとひらめく旗は

猥(みだ)らなるその最終(いやはて)の夏の曲(きよく)。

あなあはれ、あなあはれ、
あなあはれ、光消えさる。

噴水の印象

噴水(ふきあげ)のゆるきしたたり。——
霧しぶく苑(その)の奥、夕日の光、
水盤(すゐばん)の黄なるさざめき、
なべて、いま
ものあまき嗟嘆(なげかひ)の色。
噴水(ふきあげ)の病(や)めるしたたり。——

いづこにか病兒啼き、ゆめはしたたる。
そこここに接吻の音。
空は、はた、
暮れかかる夏のわななき。

噴水の甘きしたたり。――
そがもとに痍つける女神の瞳。
はた、赤き眩暈の中、
冷み入る
銀の節、雲のとどろき。

噴水の暮るるしたたり。――
くわとぞ蒸す日のおびえ、晩夏のさけび、
濡れ黄ばむ憂鬱症のゆめ
青む、あな、

しとしとと夢はしたたる。

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光
盲ひし沼にふりそそぎ、濁りの水の
聲もなく傷き眩む生おびえ。
鐵の匂のひと冷み沁みは入れども、
影うつす煙草工場の煉瓦壁。
眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。

鳴ききたる鵞鳥のうから
しらしらと水に飛び入る。

午後六時、また噴きなやむ管の湯氣、
壁に凭りたる素裸の若者ひとり
腕拱き鐵の匂にうち噎ぶ。
はた、あかあかと蒸氣罐音なく叫び、
そこここに咲きこぼれたる蒜の花、
あなや、しとどにおしなべて日ぞ照りそそぐ。

聲もなき鶩鳥のうから
色みだし、水に消え入る。

午後六時、鶩鳥の見たる水底は
血潮したたる沼の面の負傷の光
かき濁る泥の臭みに疲れつつ、
水死の人の骨のごとちらぼふなかに
もの鈍き鉛の魚のめくるめき、

はた浮びくる妄念の赤きわななき。

逃げいづる鷺鳥のうから
鳴きさやぎ、汀を走る。

午後六時、あな水底より浮びくる
赤きわななき——妄念の猛ると見れば、
强き煙草に、鐵の香に、わかき男に、
顏いだす硝子の窻の少女らに血潮したたり、
歡樂の極の恐怖の日におびえ、
顫へ高まる苦痛ぞ朱にくづるる。
刹那、ふと强く湯氣吐き、
吼えいづる休息の笛。

惡の窻　断篇七種

一　狂念

あはれ、あはれ、
青白き日の光西よりのぼり
薄暮の灯のにほひ晝もまた點りかなしむ。

わが街よ、わが窻よ、なにしかも燒酎叫び、
鶴嘴のひとつらね日に光り悶えひらめく。

汽車ぞ來る、汽車ぞ來る、眞黑げに夢とどろかし、
窻もなき灰色の貨物輛豹ぞ積みたる。

あはれ、はや、燒酎は醋とかはり、人は轢かれて、
盲ひつつ血に叫ぶ豹の聲遠に泡立つ。

二　疲れ

あはれ、いま、暴びゆく接吻よ、肉の曲。……
かくてはや青白く疲れたる獸の面
今日もまた我見据ゑ、果敢なげに、いと果敢なげに、
色濁る窻硝子外面より呪ひためらふ。
いづこにかうち狂ふギオロンよ、わが唇よ、
身をも燬くべき砒素の壁、夕日さしそふ。

三　薄暮の負傷

血潮したたる。

薄暮の負傷なやまし、かげ暗き溝のにほひに、
はた、胸に、床の鉛に……
さあれ、夢には列なめて駱駝ぞ過ぐる。
埃及のカイロの街の古煉瓦
壁のひまには沙漠なるオアシスうかぶ。
その空にしたたる紅きわが星よ。……

血潮したたる。

四　象のにほひ

日をひと日。
日をひと日。

日をひと日、光なし、色も盲ひて
ふくだめる、はた、病るなやましきもの
窻ふたぎ窻ふたぎ氣倦るげに唸りもぞする。
あはれ、わが幽鬱の象
亞弗利加の鈍きにほひに。

日をひと日。
日をひと日。

五　惡のそびら

おどろなす髮の亞麻色
背向け、今日もうごかず、
さあれ、また、絶えずほつほつ
息しぼり『死』にぞ吹くめる
血のごとき石鹸の珠を。

六　薄暮の印象

うまし接吻……歡語……
さあれ、空には眼に見えぬ血潮したたり、
なにものか負傷ひくるしむ叫ごゑ、

など痛む、あな薄暮の曲の色――光の沈默。

うまし接吻……歡語……

七 うめき

暮れゆく日、血に濁る床の上にひとりやすらふ。
街しづみ、窻しづみ、わが心もの音もなし。

載せきたる板硝子過ぐるとき車軋きつつ
落つる日の照りかへし、そが面噎びあかれば
室內の汚穢、はた、古壁に朽ちし鉞
一齊に屠らるる牛の夢くわとばかり呻き悶ゆる。

街の子は戲れに空虛なる乳の鑵たたき、

よぼよぼの飴賣は、あなしばし、ちやるめらを吹く。

くわとばかり、くわとばかり、
黄に光る向ひの煉瓦
くわとばかり、あなしばし。——

蟻

おほらかに、
いとおほらかに、
大きなる鬱金の色の花の面。

日は眞晝、
時は極熱、

ひたおもて日射にくわつと照りかへる。
時に、われ
世の蜜もとめ、
雄蕊の林の底をさまよひぬ。

光の斑
燬けつ、斷れつ、
豹のごと燃えつつ濕れる徑の隈。

風吹かず。
仰ふげば空は
烈烈と鬱金を飾ふ蕊の花。
さらに、聞く、

爛れ、饐えばみ、
ふつふつと苦痛をかもす蜜の息。

樂慾の
極みか、甘き
寂寞の大光明に喘ぐ時。

人界の
七谷隔て、
丁丁と白檀を伐つ斧の音。

大寺

大寺の庫裏のうしろは、

枇杷あまた黄金たわわに
六月の天いろ洩るる
路次の隅、竿かけわたし
皮交り、襁褓を乾せり。
そのかげに穢き姿して
面子うち、子らはたはぶれ、
裏店の洗流の日かげ、
顔青き香具師の女房ら
首いだし、煙草吸ひつつ、
鈍き目に甍あふぎて
はてもなう罵りかはす。
凋れたるもののにほひは
溝板の臭氣まじりに
蒸し暑く、いづこともなく、
赤黑き肉屋の旗は

屋根越に垂れて動かず。
はや十時、街の沈黙を
しめやかに沈の香しづみ、
しらじらと日は高まりぬ。

玻璃罎

うすぐらき窖のなか、
瓢狀、なにか湛へて、
十あまり圓うならべる
夢いろの薄ら玻璃罎。

靜けさや、靄の古びを
黃蠟は燻りまどかに

照りあかる。吐息そこここ、
哀樂のつめたきにほひ。

今しこそ、ゆめの歡樂。
降りそそげ。生命の脈は
ゆらぎ、かつ、壁にちらほら
玻璃透きぬ、赤き火の色。

微笑

朧月か、眩ゆきばかり
髮むすび紅き帶して
あらはれぬ、春夜の納屋に
いそいそと、あはれ、女子。

あかあかと据ゑし蠟燭
薔薇潮す片頬にほてり、
すずろげば夜霧火のごと、
いづこにか林檎のあへぎ。

嗚呼愉樂、朱塗の樽の
差栓拔き、酒つぐわかさ、
玻璃器に古酒の薫香
なみなみと……遠く人ごゑ。

やや暫時、瞳かがやき、
髮かしげ、微笑みながら
なにに紅む、わかき女子。
母屋にまた、おこる歡語……

凋落

寂光土、はたや墳塋
夕暮の古き牧場は
なごやかに光黄ばみて
うつらちる楡の落葉、
そこ、かしこ。——暮秋の大日
あかあかと海に沈めば、
凋落の市に鐘鳴り、
絡繹と寺門をいづる
老若の力なき顔、
あるはみな青き旗垂れ
灰濁める水路の靄に

寂寞と繋る猪木舟、
店店の装飾まばらに、
甃石ちらほら軋る
空ぐるま、寒き石橋。——
鈍き眼に頭もたげて
黄牛よ、汝はなにおもふ。

晩秋

神無月、下浣の七日、
病ましげに落日黄ばみて
晩秋の乾風光り、
百舌啼かず、木の葉沈まず、
空高き柿の上枝を

實はひとつ赤く落ちたり。
刹那、野を北へ人靈、
鉦うちぬ、遠く死の歌。
君死にき、かかる夕に。

飢渇

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。
わが熱き炎の都、
都なる煉瓦の沙漠。
沙漠なる硫黄の海の廣小路、そのただなかに、
饑ゑにたるトリイトン神の立像、
水涸れ果てし噴水の大水盤の繞には、

白琺瑯の石の級ただ照り渇き痺れたる。

そのかげに、紅き襯衣ぬぎ
悲しめる道化芝居の觸木うち、
自棄に彈くギタルラ彈者と、癪持と、
淫の舞の眩暈、
さては火酒かぶりつつ強ひて轉がる醉漢と、
笑ひひしめく盲らは西瓜をぞ切る。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

既に見よ、瞬間のさき、
仄かなる愁の文にしみじみと
龍馬の羽うらにはひ透き、搖れて縺つれし
水盤の水ひとたまり。

あるはまた、螺を吹く神の息づかひ
焔に頻吹きひえびえと沁みにし歌も
今ははや空びぬ、聽くは饑ゑ疲れ
鉛になやむ地の管の苦しき叫喚。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

虛空には銅色の日の髑髏轉びかがやき、
雲はまた血のごと沈默に鎔けゆき影だに留めず。
ただ病める東南風のみぞ重たげに、また、たゆたげに、
腐れたる翼の毒を羽ばたく。
七月末の長旱、今しも眞晝、
煉獄の苦熱の呵責そのままに
火輪車駛り、石油泣き、瓦斯の香喊き、
眞黑げに煙突震ふ狂ほしさ、その騷がしさ。

誰ぞ、また、けたたましくも
朱の息引き切るごと、
狂氣なす自動車驅るは。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

狂氣者よ、人轢き殺せ。
積持ちよ、血を吐き盡せ。
掻き鳴らせ、絃切るるまで。
打ち鳴らせ、木の折るるまで。
飛びめぐれ、息の根絶えよ。
醉へよ、また婆娑にな覺めそ。
盲らよ、その赤き腸を吸へ。
あはれ、あはれ、

この旱つづかむかぎり、
汝が飢渇癒えむすべなし。

あな熱し、あな苦し、あなたづたづし。

尋めゆくあゆみ

いと高くいと深くいと静にいと蕭やげる
夜の森のかげ、暗く冷なる列のもとを、
われはあゆむ。

いと高くいと暗くいと密にいとほのかなる
細らなる赤楊の列、そのもとの底の底を

われはあゆむ。

いと高くいと深く沈みたる憂愁のもとを
眞素肌のましろなる、衣つけぬ常若の矜もて
われはあゆむ。

赤楊のとある梢、ありとしも見えぬ空のけはひ、
あはれその枝に色紅き小鳥の如も星の見ゆる。
あはれひとつ。

いと高くいと深くいと靜にいと蕭やげる
夜の森のかげ、暗く冷なる列のもとを、
われはあゆむ。

さあれ今言いはぬ獸忍びかに蹤きぞ來ぬる。

昨日より去年より生れしより、否、前世より
　　蹤き來ぬる。

かかる夜のとある梢、哀れその空に星の見えつ。
紅き星紅き星ほのかにもわれは知れり、
　　かかるゆめも。

いと高くいと深くいと冷にいと薫やげる
夜の森のかげ、ふとし、あな、路は落つる。
　　あらぬ谷間。

哀れ哀れ、あらぬ谷にいと暗く靈や落つる。
眞素肌の悲哀よ血の香する荊棘のなかを
　　いかにわけむ。

足音のす、言いはぬ獸忍びかにひき歸すらし。
哀れまたひとつ星、見もあへぬ闇のかなたに
　　　　　はたや消ゆる。
忽にものの呻吟、やはらなる足に觸れつつ
そこここの血の荊棘あなやその暗き底より
　　　　　赤子啼きいづ。

顔の印象

精舎

うち沈む廣額、夜のごとも凹める眼
いや深く、いや重く、泣きしづむ靈の精舍。
それか、實に聲もなき秦皮の森のひまより
熟視むるは暗き池、谷そこの水のをののき。

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩なげく
寂寥や、空の色なほ紅ににほひのこれど、
静かなる、はた孤獨、山間の霧にうもれて
悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。

かかる間も、底ふかく青の魚盲ひあぎとひ、
口そそぐ夢の豹水の面に血音たてつつ、
みな冷やき石の世と化りぞゆく、あな恐怖より。

かくてなほ聲もなき秦皮よ、祕に火ともり、
精舍また水晶の凝る時、愁やぶれて
響きいづ、響きいづ、最終の靈の梵鐘。

醋の甕

蒼ざめし汝が面、饐えよどむ瞳のにごり、
薄暮に熟視めつつ撓みちる髮の香きけば、
醋の甕のふたならび人も無き室に沈みて、
ほの暗き玻璃の窻ひややかに愁ひわななく。

外面(とのも)なる嗟嘆(なげかひ)よ、波も無きいんくの河に
旗青き獨木舟(うつろぶね)そこはかと巡(めぐ)り漕ぎたみ、
見えわかぬ惱(なやみ)より錨(いかり)曳(ひ)き鎖(くさり)卷かれて、
伽羅(きやら)まじり消え失(う)する黑蒸汽(くろじようき)、笛ぞ呻(うめ)ける。

吊橋(つりはし)の灰色(はひいろ)よ、疲れたる煉瓦(れんぐわ)の壁(かべ)よ。
たまたまに整(ととの)はぬ夜(よ)のピアノ淫(みだ)れさやげど、
ひとびとは聲もなし、河の面(おも)をただに熟視(みつ)むる。

はた、甕(かめ)のふたならび、さこそあれ夢はたゆたひ、
内と外(そと)、かぎりなき懸隔(へだたり)に帷(とばり)墮(お)つれば、
あな悲し、あな暗(くら)し、醋の沈默(しじま)長くひびかふ。

「白秋詩抄」畢

解　説

吉田一穂

本書の初版は昭和八年の晩春、白秋先生からその撰抄を委ねられて、私が編纂したものである。既刊のおびただしい詩篇を、文庫版に集約するため類型を避けながら、しかも詩人の特質を多面的に示そうとして、やむなくこの『白秋詩抄』を基本に、他を『抒情詩抄』とに分ちて二冊とした。初版詩集の底本と全集その他との校合に際して生ずる異同や錯落も、こゝに採錄された詩篇に關するかぎりは、重版ごとに白秋自ら再三、校訂の目を通して決定稿を成したのであるから、その憂いも消え、むしろ本書こそ基準たるべき正版であると信じる。

爾後、二十數刷を重ねて鑄を滅し、新たに開版するに至って、すでに白秋亡く、こゝに編者の責任において時代の推移に應え、いさゝか表記に新風を添えた。白秋韻律の誦みの澁滯は致命的であるから、舊版にして讀みにくいと思われる字句の初出や、また現行制限外の漢字など、ふりがなを附して、讀者の味解に副わんことを期した。しかるにこの際、新假名遣を採用しなかったのは、もとより詩は感性的な表現であり、かつまた古典として白秋詩の位置も定まり、その韻律と文體は白秋獨自の慣用法をともなって、微妙なニュアンスを形成しているから、みだりにその

原型に指染むべきものではないのである。當時にして同流を措き、門外の私に撰抄の任を委ね、自選の獨斷を斥けて、他者の批判に自ら恃むある白秋の深慮は、さらにこの書の客觀性を高からしめたものといわねばならない。改めて私は新版の責任を感じるものである。

『白秋詩抄』は五冊の詩集、〈海豹と雲〉〈水墨集〉〈白金ノ獨樂〉〈雪と花火〉〈邪宗門〉から採錄したもので、年代の新しいものから舊いものへと、發行順を逆に配列した。〈思ひ出〉は『白秋抒情詩抄』に讓り、選集以後の〈新頌〉など、晩年、歿後の詩集は、新版にも編入できなかった。しかしこの二冊の詩的生成と發展の張りつめた絃から、餘後の嫋韻は感得できるし、同じ文庫版の『白秋歌集』は、補ってその管部を形成する。

以下、年譜をたどり、わが見解の過ちなからんことを希い、書誌的に、詩人白秋とその背景を素描して、解說の責を果したい。

明治十八年（一八八五）白秋が呱々の聲をあげて、その詩歌の源流を發し、古神の俤をとめて詩人の再び歸ったうぶすなの地は、水鄉柳河である。日本近代詩の曙に生れ、すでに明治二十年後半の浪曼主義的抒情詩を決した藤村時代、その空のもとで幼年期を送り、十七歲にして白秋を號し、翌明治三十五年、醉茗の「文庫」に據って短歌を發表し、暫次、詩作に移った。留意すべきは彼れの發聲が、日本の笛の音に始まったことである。二十歲で上京、籍を置いた早稻田の文科では、牧水、善麿らと同期であった。當時の詩壇を風靡した豐麗典雅な泣菫調の王朝式高踏派と

もいうべきに對して、明治三十八年、有明の「春鳥集」が始めての意識において象徴詩を樹てた。この影響下に彼れの習作時代を經た明治三十九年、白秋二十二歳の時、新詩社に入って、晶子、勇、杢太郎、啄木らと伍して、明治四十年代の天馬の如き活動期に入ったのである。「明星」には〈おもひで〉の小曲、〈邪宗門〉の天草雅歌など、卽ち白秋の獨自性を形成しはじめた第一期のオリジンを露頂し、ついで新詩社脱退、杢太郎、勇、柏亭、鼎らと〈パンの會〉に結んで、異國情緒と江戸趣味の混淆の釀すデカダンの美を追い、雜誌〈スバル〉を創刊して「桐の花」の歌を作ったのも、その頃である。

「邪宗門」は明治四十二年、彼れが二十五歳の時の第一詩集である。その扉に「こゝ過ぎて曲節の惱みのむれに、――官能の愉樂のそのに、――神經のにがき魔睡に、」と銘してはっきり、詩人の第一格を示している。卽ち自己の血肉を通してでなければ、いかなる觀念も普遍の抽象形式にすぎない。詩は證明ではなく、神がものを置くように、事物を創造することである。この強烈な自我解放の詩集は、既成の形式觀念に對する反抗であり、萎靡した沈潛のデカダンではなく、それを詩人生誕の契機としたのである。勿論この頽唐詩集には、ボオドレイルやダンテからの投影らしきものが考えられる。いわんや上田敏の譯詩集『海潮音』が、いかに當時の詩人の心悸を昂めていたか、また西詩によって近代詩が興ったことも周知のことである。しかし自分の唇で曲節をあやつり、自ら感覺し、未知をまさぐる神經をもって、印象と情緒を象徴化しようとした、この若い天才的な詩人のプロテストは、藤村、有明、そして白秋へと浪曼主義的系譜のピリオッ

ドとなった。明星派浪曼主義の王朝風に對して、「邪宗門」はまさしく西歐詩の近代性を日本の肉體と化したユニークな詩集である。偏奇的なまでに重疊たる語彙の特異性、流麗な律音、金と赤との絢爛たる色調、印象の鮮かさ、豐かな情緒、まさしくこれは日本近代詩の自覺と自立の新しい導標となったのも至當である。

「思ひ出」は四十四年、東雲堂から出て、世評高く、詩人白秋の位置を決定づけた。制作の順序は必ずしも「邪宗門」以後とのみかぎらず、むしろその前や同時のものもあること、「東京景物詩」や「桐の花」などと同じく、奔放無碍、噴きあふれるこの一時機に成った自在の發想である。他者の影響の微塵もない、白秋獨殊の性格を直接した天成の童心詩篇としての「思ひ出」は、心理的に處女詩集であろう。幼年の目醒めにはじまる稚語的幻想の世界、逆に源泉回歸の望郷の歌である。彼れは無垢の人であった。斷じてデカダンではない。いかなる惡も彼れを染めることはできなかった。白秋によって今日の兒童が發見されたのである。この童神の原型を「思ひ出」の中から引き出すことは容易である。歿後刊行の柳河風物詩「水の構圖」とこの詩集との環の結びをあげて、この項の詳細は「白秋抒情詩抄」の略解にゆずる。

大正二年「桐の花」を出した。第一歌集であるが、次の「雪と花火」や、前掲の詩集と連續した白秋第一期の作品で、しかも白秋藝術のオリジンを成す香り高い珠玉である。この作品を抜いて白秋の前後は考えられない。詩をもって短歌を近代性に美しく爽かに目醒ましめた觸感の藝術である。

「雪と花火」は大正五年〈東京景物詩〉として出した詩集である。一見〈邪宗門〉風ではあるが、江戸情趣と近代化の交錯する陰翳、薄明と憂愁の都市のボヘミアン、自らを頽唐末期の詩王に擬した時代のものである。

「畑の祭」は大正二―三年の制作ではあるが、全集本に収録されるまで一本として刊行されていないが、詩風が一變して、なにか憑かれたやうに明るみを希い、自ら故意に駈けるばかりの輕快に身を弾ませている。これは大正三年の末に出した「白金ノ獨樂」の一讀によって、その轉機の回心に觸れうるであろう。まさしくデカダンは彼れの本心ではなく、一つの僞惡であり、或は過去の觀念と戰うための反抗手段だったにすぎない。彼れにとってこの世は淨土でなければならなかったのだ。天性、玲瓏として珠のごとく、かつは明朗豁達な健康者であった。それゆえ三尺の童子も、彼れの唇に和してともに唄いうるのだ。存在に對してつねに驚く幼兒の感覺をもって新しく出發したのである。そしてこの前萬葉的な詩人は、雪崩をうって第二期の詩作に奔騰していった。

「水墨集」は大正十二年の出版である。こゝではかつての絢爛華麗な洋畫風の外光、金と赤とは影を消して、東洋風の陰翳に代わり、墨繪の枯淡、銀の繊い月、竹葉の影すら、詩を動かす軸として据わるのである。勿論こゝに至る消息は直接、詩的經緯を表わしていないとしても、夥しい短歌や童謡、民謡、その他の散文の制作から推理して、彼れの駈け登った詩的水準は望見できる。この心境の閑寂清楚な作品群に、心靜めて讀み入るならば、自らにして淨化され、古寺の石

庭に面するかにおもわれよう。

昭和四年「海豹と雲」は大白秋の偉容を示すモニマンタルな巨峰である。永い詩的遍歴の後、ついに蒼古幽玄な、しかも純粋な日本的〈詩格〉を創成して、斷乎たる詩人の風貌に接するのである。もはやそこには何んの遲擬も逡巡もない。莞爾たる童顏、玉のごとき溫容を見る。彼れはついに回歸して日本の言葉が民族意識を形成する唯一の要素であることを知ったのである。言語はその民族の血であり肉であるのだ。古代の神々は彼れの言葉によって新しく呼び出され、われわれと同列に、否、われらとして現前した。これが詩の次元である。朗々とたゞ誦むがいゝ。古代の韻を踏んで神々たちが、佛教も儒教もキリスト教も知らぬ、日本の自然が前萬葉の素肌の荒神たちが、われらの本態を現出する美しい幻を見るであろう。日本の笛の哀憐にはじまってオルガン調から、ヴィオロンの絃に、セロの莊重に、ピアノの近代的タッチで彈奏した、この管絃樂の最高調は、二冊の文庫本をもってしても充分、うかがわれうるはずである。詩集「新頌」の中なる〈海道東征〉をこれに加えず、遺憾であるが、他日、目に觸れる機會あらば、筆者の證も立つであろう。それは詩抄の卷頭以下の諸篇から、當然の歸結として考えられる一大交響詩である。

浪曼主義の最後の詩王・北原白秋の生涯は終った。晩年、薄明に坐して心眼いよいよ澄み、その靜寂の美しい心境を語る歌集は、すでに諸士の前にある。いかなる征矢もこの天馬を射落すことができなかったが、昭和十七年（一九四二）五十八歳にして寂した、賞讃の花束に埋れて。

白秋詩抄
定価 ★★

昭和 八 年五月五日 第一刷発行
昭和三十二年五月六日 第二十四刷改版発行
昭和三十六年十一月二十日 第二十八刷発行

著者 北原白秋（きたはらはくしゅう）

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者 岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者 山田一雄

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
発行所 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

読書子に寄す

——岩波文庫発刊に際して——

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繫縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

読書家の道しるべ

一〇〇冊の本

——岩波文庫より——

選者

臼井吉見　大内兵衛
大塚久雄　貝塚茂樹
茅　誠司　久野　収
桑原武夫　武谷三男
鶴見俊輔　中野重治
中野好夫　松方三郎
丸山真男　山下　肇
渡辺一夫

（五十音順）

岩波文庫は創刊以来三十五年、今や世界にくらべるもののない古典の宝庫となった。発刊当時の若い読書人のなかには、この文庫に自分の生涯の教養を託すとまでいった人があった。けれども、これから読書をはじめようとする人が、もし岩波文庫に注意をむけたとしても、今や二七〇〇余点を擁するこの古典の大森林の前に立っては、どこからとりかかってよいか、茫然とするにちがいない。もとより、わが文庫に収められたものは、すべて人類の宝であるから、いずれをとり、どのように読み進めても差しつかえはないだろう。しかし、この幅広く奥行も深い多種多様な古典の大森林の中から自分に適したものを選択することは、むずかしいと考えられるのである。ことにこれから読書をはじめようとする若い人たち、たとえば十五歳から二十五歳までの人たちがその十年間に、この程度のものを読もうと、自分で一つの計画を立てることは不可能に近いだろう。そこでわれわれは、読書についての高い識見と豊かな経験をもたれる先生たちにお願いし、若い人々のために読書の指標を立てることを目的として、この一〇〇冊を選択していただいたのである。

われわれは、この百選が若い人たちにとって有効であることを確信し、将来永く利用されるものと期待している。

ヴェニスの商人 ★★
吾輩は猫である 全二冊 各★★★
啄木歌集 ★★★
モンテ・クリスト伯 全七冊 各★★★
ハックルベリイフィンの冒険 全二冊 上★★ 下★★★
水滸伝 全十五冊 一—六★★ 七以下未刊
銀河鉄道の夜 他十四篇 ★★★
アルプス登攀記 全二冊 各★★★
デミアン ★★

ビーグル号航海記 全三冊 各★★★
福翁自伝 ★★★
レ・ミゼラブル 全七冊 二★★ 四★★★★ 他★★★
赤と黒 全二冊 上★★★ 下★★★★
高村光太郎詩集 ★★
荒野の呼び声 ★
世界をゆるがした十日間 全二冊 上★★★ 下★★
友情 ★
唐詩選 全三冊 上★★ 中・下未刊

ファウスト 全二冊 各★★★★
余は如何にして基督信徒となりし乎 ★★★
＊＊＊
ハムレット ★★
フランクリン自伝 ★★★
共産党宣言 ★
ソクラテスの弁明・クリトン ★
罪と罰 全三冊 一★★ 二・三★★★
富嶽百景・走れメロス 他八篇 ★★

藤村詩抄 ★★

アンデルセン自伝 ★★★

ジャン・クリストフ 全八冊 二・六・七★★ 他★★★

トニオ・クレエゲル ★

空想より科学へ ★

貧乏物語 ★★

古代への情熱 ★★

クォ ヴァディス 全三冊 上・下★★★ 中★★

武器よさらば 全二冊 各★★

真空地帯 全二冊 各★★

若きエルテルの悩み ★★

羅生門・鼻・芋粥・偸盗 ★★

萩原朔太郎詩集 ★★★

カラマーゾフの兄弟 全四冊 一・四★★★★ 二・三★★★

＊＊＊

ベートーヴェンの生涯 ★★

田園交響楽 ★

白秋詩抄 ★★

ロウソクの科学 ★

寺田寅彦随筆集 全五冊 各★★★

ベルツの日記 全四冊 各★★

茶の本 ★

外套・鼻 ★

旧約聖書 創世記 ★★

饗宴 ★★

新訂新訓 万葉集 全二冊 上★★★★ 下★★★

昆虫記 全二十冊 一・六★★★★ 他★★

ユートピア ★★
折たく柴の記 ★★★
懺悔録 全三冊 上★★★★ 中・下★★★

斎藤茂吉歌集 ★★★
桜の園 ★
蘭学事始 ★

どん底 ★★
暗夜行路 全二冊 各★★★
阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 ★★

賃労働と資本 ★
***
にごりえ・たけくらべ ★

論語 ★★
父と子 ★★★
永遠平和の為に ★

平家物語 全二冊 上★★ 下★★★
リンカーン演説集 ★★
実践論・矛盾論 ★

戦争と平和 全八冊 一・八★★ 二—七★★★
徒然草 ★
人形の家 ★★

水と原生林のはざまで ★★
こゝろ ★★★
或る女 全二冊 前★★ 後★★★

レーニン 帝国主義 ★★
破戒 ★★★
善の研究 ★★

歎異抄★　方丈記★　職業としての学問★

タルチュフ★　ボヴァリー夫人 全二冊 上★★ 下★★★　人権宣言集★★★

**

嵐が丘 全二冊 各★★★　谷間のゆり 全二冊 上★★★ 下★★

おくのほそ道★★　土 全二冊 各★☆　イーリアス 全三冊 上★★★ 中・下★★★

静かなドン 全八冊 一—七★★★ 八★★★★　ミル自伝★★★　文明論之概略★★

蟹工船、一九二八・三・一五★★　息子たちと恋人たち 全四冊 各★★

**

社会契約論★★　この人を見よ★★

方法序説★★　女の一生★★★

阿部一族 他二篇★　好色五人女★★

この百冊の本を

桑原武夫

岩波文庫のなかから、百点を選びだす。それは、大胆不敵な試みと見えるかもしれない。

たしかに、読書の楽しみはまずその自由選択にある。世界ならびに日本の不朽の名作をほとんど網羅したといってよい岩波文庫のなかから、自分の好む分野において、自分の好む著者のものを自由に選びとって、人類永遠の知恵を味わう、というのが本来の読み方であることは、いうまでもない。

しかし、そうした自由選択のできるのは、じつは読書についての老練者であって、自由の美名のもとに、ただ流行の波にもてあそばれている人も決して少なくはないのである。それをあざ笑い、またはなげくよりも、自由に選んであやまたぬ眼をやしなうことが先決であろう。ただそれには順序がある。

読書の楽しみをおぼえた若い人びとが、基本的な古今の良書を読もうとして、岩波文庫の総目録をひらくとしても、二七〇〇余点のうちから、まず何を読めばよいか、選択に迷うというのが実情である。そこで編集部が、ながい読書経験をもつ十五人の協力をえて、現代に生きる日本の若い人びとにまず読んでほしい本を百点選びだしたのは、適切にして親切な試みだといえる。

甘美なもの、深刻なもの、感情をゆさぶるもの、思想に切りこむもの、内容はさまざまだが、いずれも興味ぶかいこの百点を読むうちに、若い心情がゆたかにきたえられ、やがて自由に、しかも自分に即して、ほかのよい本を選びうるようになることを、私は疑わない。確信をもって、まずこの百点をすすめる。

書目は、五つのグループに分けました。『ヴェニスの商人』からの第一のグループは、面白いもの、あるいは多くの青年が抱く心の問題を解決するために、なんらかの役に立つと思われるものを選びました。

『ハムレット』からの第二のグループは、小説の大作、あるいは人生について考えるために役立つと思われるものを選びました。

第三のグループ以下のものは、読みやすいものから、次第に思想内容の深いものへとの心積りで並べました。

詳しくは、このために新しく作った小冊子『一〇〇冊の本』をご覧下さい。申込み次第、進呈します。(宛先・小社『一〇〇冊の本』係)

岩波文庫既刊書目については『解説付文庫目録』がございます。御希望の方は近くの書店にお申込み下さい。

岩波